

日本財団 パラリンピック研究会
紀要 第3号(別冊)

September 2015



日本財団パラリンピック研究会 紀要

第3号 (別冊)

2015年9月

近年のパラリンピック大会が日本に残したもの

—北京, バンクーバー, ロンドン, ソチの
パラリンピック大会の教訓と「遺産」—

目 次

はじめに	1
A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題	2
B. 大会運営上の問題点と今後の課題	3
1. 北京大会の「遺産」と教訓	3
A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題	3
B. 大会運営上の問題点と今後の課題	9
2. バンクーバー大会の「遺産」と教訓	13
A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題	13
B. 大会運営上の問題点と今後の課題	18
3. ロンドン大会の「遺産」と教訓	19
A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題	19
B. 大会運営上の問題点と今後の課題	26
4. ソチ大会の「遺産」と教訓	29
A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題	29
B. 大会運営上の問題点と今後の課題	34

The 'lessons' the last four Paralympic Games have left for Japan

Contents

Introduction	42
A. Lessons for the Japanese team and tasks for Japanese society	42
B. Administrative issues and overall tasks for the future	43
1. Beijing Paralympic Games	44
2. Vancouver Paralympic Games	46
3. London Paralympic Games	48
4. Sochi Paralympic Games	51

近年のパラリンピック大会が日本に残したもの

——北京，バンクーバー，ロンドン，ソチの
パラリンピック大会の教訓と「遺産」——

小倉 和夫

(日本財団パラリンピック研究会)

はじめに

パラリンピック大会の「遺産」研究は、オリンピック大会の「遺産」研究の影響を受け、経済的効果、社会的インパクト、障害者政策への影響といった観点から論じられる傾向がある。

しかしながら、パラリンピックは多くの国にとって、依然として「参加」に意味がある場合も多い。また日本にとっては、そもそも選手の競技能力の向上のための条件や社会の取り組み方に問題があるにもかかわらず、そこに主たる焦点を当てずに、経済的、社会的効果やインパクトに関心を向けることは、(経済的、社会的効果の定義のしかたにもよるが) 必ずしも適当とは思われない。

大会に参加した選手の印象や選手支援策などについての評価は、日本パラリンピアンズ協会によるパラリンピック選手の競技環境調査などにも明らかにされているが、この調査は個々のパラリンピック大会の「遺産」ないし「教訓」という観点から行われたものではない。また、ソチ・オリンピックなどについては、選手強化策や練習環境整備の効果の検証が行われているが、パラリンピックについては十分な検証がなされていない。これらの検証が、国家予算が有効に使われてきたかという点に焦点が当てられていることから、日本の選手支援体制そのものやパラリンピックをとりまく社会環境の影響を大会ごとに分析したものは見出し難い。

本稿では、近年(2008年北京大会以降)の各パラリンピック大会が日本選手団及び日本社会にどのような教訓を残したか、そうした教訓はその後の大会に生かされたか、また日本から見て、各大会の運営のやり方などについて、その欠陥あるいは美点をどう感じたか(パラリンピック運動そのもののあり方や大会のやりかたについての日本の見方)を、大会ごとに(各大会の特徴により若干体裁は異なるが)基本的には、A. 競技

能力など日本選手団への教訓及び日本社会全体の取り組み方、B. 大会の運営ぶりについて今後参考となるべき点の2項目（相互にやや重複する場合もあるが）に分けて、考察したものである。その際、上記の問題意識から、分析のための材料としては、各大会の日本選手団報告書と三大紙（朝日、毎日、読売）の報道（夕刊、地方版を含む。以下特記なき場合は、東京版朝刊を意味する）を用いた。

大会ごとの分析に先立ち、まずは4大会を通じて明らかになった横断的な事項を整理する。

A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題

- (1) 選手の競技能力及び選手の対応について、4大会を通じて多くの選手、コーチがほぼ等しく指摘している点は、日本選手の競技能力が国際水準に追いついておらず、メダル獲得をはじめとして成績がふるわない種目が多かったことである。その原因について、個人的、あるいはミクロ的理由として挙げられるものは、①精神力の弱さ（全大会共通）、②基礎体力の弱さ（バンクーバー、ロンドン）、③体調の維持管理の問題（北京、バンクーバー）、④競争相手あるいは相手国に関する情報入手の不足（北京、ロンドン）、⑤競技のやり方の変容についての認識あるいは対応の問題（北京）などであった。
- (2) 現地での選手サポート体制に問題があったとする指摘も少なくない。そうした指摘としては、①選手をサポートするスタッフの数の不足——とりわけ用具の管理要員（バンクーバー）、コーチ（ソチ）、医療関連スタッフ（ソチ）、②選手団内部における情報共有の欠陥（ロンドン、ソチ）、③選手とスタッフとの関係——選手のモラルの問題を含む（北京）、④用具開発における日本の国際的有利性の低下あるいはその怖れ（ソチ）などが挙げられる。
- (3) より広い視野から日本における障害者スポーツをめぐる環境の問題点・課題を指摘したものとしては、①練習場所の不足（バンクーバー）、②練習時間の確保の困難（北京）、③健常者との合同練習の拡大の必要性（ロンドン、ソチ）、④選手の「プロフェッショナル化」の必要性（ロンドン）、⑤競技団体間の連絡体制改善の必要性（ロンドン）、⑥競技団体のガバナンス強化の必要性（ロンドン）などが注目される。
- (4) さらに一般的な社会問題として指摘された事柄としては、たとえば、①企業支援の増大の必要性（北京、ソチ）、②テレビ報道の拡充と報道姿勢の変化（北京、ソチ）などがある。

B. 大会運営上の問題点と今後の課題

- (1) 大会参加者について、競技の高度化とクラス分けの簡素化の結果、重障害者の参加がますます困難になっており、課題として残されている。
- (2) 競技日程について、夜間遅くの競技開催の是非を問う声があった。また、(主として冬季大会について) 日程変更が選手に与える負担をどのように軽減するかの問題がある。
- (3) 競技場について、選手の観覧席の位置に関し配慮を求める声があった。
- (4) 選手村について、一部の競技で分散宿泊の是非、選手村への介護者の入場制限などについて問題提起があった。
- (5) クラス分けについて、そもそものやり方の他、そのタイミングに関する要望があった。タイミングの問題については、競技ルールの変更が大会直前に行われることの是非を問う声もあった。
- (6) 一部のパラリンピック競技は観客になじみの少ないものもあり、観戦マナーについて啓発が必要との意見があった。

1. 北京大会の「遺産」と教訓

A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題

(1) 競技能力の格差

北京パラリンピック大会で日本選手団が多く競技種目で感じたことは、世界の競技レベルと日本のレベルとの大きな格差であった。こうした格差(言い換えれば、日本の技術力向上を上回る世界水準の向上)は、陸上競技¹⁾、馬術²⁾、ゴールボール³⁾、水泳⁴⁾、シッティングバレー⁵⁾などで顕著であった。また柔道では、競技のやりかたが日本における伝統と違った形に変容していることから来る「格差」もあった。この点について、ある柔道コーチは、次のように語っている。

何故(日本は)メダルを取れなくなってしまったのか。近年外国の柔道が急速に発展し、その柔道スタイルも変わってきた。柔道技で投げて一本を取るといより、足を取り、裏投げをするなど、まさしくレスリングである⁶⁾。

4年後のロンドン大会の日本選手団報告書においても、世界との格差の拡大は相変わ

らず多くの分野で言及されており、(また、ロンドンにおける日本のメダル獲得数が激減したことに現れているように、)技術能力向上についての北京の教訓は、十分には生かされなかったと言える。

(2) 情報不足

日本の敗因の1つとして、海外における競技レベルや外国選手の動向について、事前に十分な情報収集がなされていなかったことが指摘されている⁷⁾。

格闘技などの場合にはとりわけ、相手のスタイルや癖について十分な情報収集が必要なはずであるが、それが行われて来なかったという反省があった。同じような指摘は、ロンドン大会についてもあり、十分な改善がなされたとは言い難い。

(3) 精神面での弱さ

選手の精神面での弱さについては、選手自身、コーチ、監督を問わず、報告書の随所に現れているが⁸⁾、ロンドン大会でも同じであり、日本選手団の基本的問題点と言ってよい。北京大会では、そうしたことも考慮して、選手の「メンタルサポート」を担当する専門家が、水泳競技で初めて選手団に同行したが⁹⁾、その効果の検証が必要であろう。

また、精神面の問題と関連して、選手自身の意識改革の必要性を指摘する声があったことにも注目すべきであろう。具体的意見としては、他人依存から自己管理への転換という意識改革の問題があった。ある陸上競技選手は北京大会の体験として、「長期の故障により、ケガに対して『治してもらおう』から『自分で治すんだ』という意識が変わった」と述懐している¹⁰⁾。

(4) 基礎体力の問題

競技能力や技術もさることながら、日本選手の基礎的な体力や体格を強くする必要性については、水泳、ボート、シッティングパレーなどで指摘されているが、他方、その競技特有の技術習練よりも、筋力などの基礎的トレーニングが成果を取めたことを指摘する例も見られる。たとえば、車椅子陸上800メートルで1位となった伊藤智也は、「背中など動かせる筋肉」を中心に「肉体改造」を行ったと述べている¹¹⁾。

(5) 体調管理

障害をもつ選手は、健常者以上に体調管理に気を配らねばならないはずであるが、パラリンピック大会は世界選手権大会などと比較して滞在日程が長いので、体調管理は一層複雑となる。

とりわけチーム競技では、体調管理は個人の問題を超えてチーム全体に影響を及ぼす深刻な問題であり、シッティングバレー¹²⁾、ウィルチェアラグビー¹³⁾などで問題が発生したと見られるが、それらに限らずかなり広い範囲でこの問題が起こった模様である。現に陸上競技コーチの1人は、「大会期間中、大会（競技）直前に故障する選手や体調を崩し入村するパラリンピック経験選手が多くいたことにショックを受けた」と述懐している¹⁴⁾。

北京での体調の問題は、現地の空気汚染などの環境や食品衛生問題、さらには日中関係一般をめぐる精神的不安なども影響していたと見られるが、今後、大会開催場所如何によっては、一層注意を払うべき点であろう。

(6) 練習環境

練習環境については、他国の選手たちがプロ化し、競技に専念して練習に励むことができるのに対して、日本選手の場合、勤務との両立の関係で「(外国人の)優勝タイムに及ぶ練習ができなかった」との意見もあった¹⁵⁾。他方、同じ選手は同時に、大会直前に国立スポーツ科学センターで行われた合宿がメダルにつながったという意見も述べている¹⁶⁾。また、長年連れ添った「コーチが自分の可能性を引き出してくれた」として¹⁷⁾、長期にわたる選手とコーチとの関係を重視する意見もあった。

(7) 用具

用具については、折から世界的に注目を集めていた英国スピード社製の水着レーザーレーサー（LR）をパラリンピックでも使用すべきかが問題となった。もともとの水着は着用にかかるという難点があり、また、障害の種類によっては、かえって問題があることがあらためて確認され、この水着の使用者は日本代表18人のうち6人とどまったが、その間の経緯と着用時間の問題については、次のような報道がなされており、北京での経験は、水泳陣にとって1つの「遺産」となった感がある。

LRの使用を予定しているのは河合純一、笠本明里、生長奈緒美と、視覚障害を抱える選手が半数を占める。その理由の1つに「締め付け」がある。

運動機能障害の選手らは障害によって手足がなかったり、左右いずれかの半身が細かったりする。この場合、水着と体の間にすき間ができ、そこに水が入ってタイムが伸びない可能性があるという。そのため、これらの選手は以前から使っている水着で大会に臨む。

一方、締め付けのきつさから着用にかかる時間がかかっていたLRだが、利用するごとに

慣れ、現在は当初の半分以下の時間になったという¹⁸⁾。

また、陸上競技では、「アルミよりも軽く強い素材」で空気抵抗の少ない炭素繊維で作られた車椅子が初めて登場した¹⁹⁾。

自転車競技1000メートルタイムトライアルで銀メダルを獲得した藤田征樹の用いた義肢には、特殊な技術が用いられていた。

足の切断部分を包むソケットを従来の半分以下の厚さ1ミリまで削り込み、ペダルに乗せる木製足部を限界まで小さくすることで、片方で1,300グラムあった義足を800グラムに軽量化。すね部分のアルミを包み込むカーボンも流線形に加工し、抵抗を減らした²⁰⁾。

(8) 社会的課題

① 組織的取り組みの必要性

外国との比較において、競技能力の向上のためには、個人の努力には限界があり、組織的、国家的取り組みが一層必要であるとの声が上がったが²¹⁾、これは社会全体の意識の問題と連動していると言えよう。

スポーツ界の意識のありかたとの関連では、「世界の流れに対応していくには『障害者のスポーツ』という『障害者』を前面に出した枠組みではなく、『スポーツ』を軸にした流れの中に『障害者』を組み込んで行く必要がある」との意見もあった²²⁾。

また、社会一般との関連では、選手のプロ化ないし準プロ化の問題が打ち出されるようになったことが注目される。盲人マラソンのガイドランナーの1人は次のように述べている。「海外選手に聞くと皆チームに所属し、いわば日本で言う実業団選手のような生活をしていると聞きました。実際、北京のレースでは実業団選手（海外選手）と市民ランナー（日本選手）の戦いの様なレベルの差をみせつけられました²³⁾。」

② 選手のモラル（倫理的側面）

北京大会における日本選手の行動についての反省点の1つとして指摘されていることに、選手のモラル面の問題、すなわち倫理的あるいは社会道徳的に如何かと思われる行為の問題があった。

通常この種の問題は、表に現れにくい問題であるにもかかわらず、大会の公式選手団報告書においては、3つの異なる分野（陸上競技、水泳、射撃）で選手のモラルに問題があったことが指摘されており、そこにかかなり深刻な問題があったことが読み取れる。

たとえばある射撃コーチは、「生活面では、結果的には一部の選手の自己中心的行動に全員が翻弄された大会であった」と述懐している²⁴⁾。

また、陸上競技のコーチの中には、「一部の選手による行き過ぎる要望」があったことを指摘するものがあり、「一部の選手の暴走により飛び火した『モンスターアスリート』なるものが増えないよう、競技だけでない人間としてのモラルを学んでいただけるような組織にしていかなければならないと痛感している」という意見まであった²⁵⁾。(こうした感想は、ロンドン大会の報告書では目立っておらず、選手のモラルに関する限り、改善がなされたのではないかと考えられる)。

もっとも、北京における選手のモラルに関するこのような問題の背後には、選手の要望の取り扱いの問題、ひいては、選手、スタッフ、役員の間それぞれの役割についての理解が相互に不十分であったことが影響しているという見方もあり²⁶⁾、また、選手の年齢構成が非常に若かったことの影響もあるとされる²⁷⁾。そうとすれば、この問題は選手に対する教育や配慮の問題だけではなく、競技団体内部のガバナンスや学校教育、社会教育一般の問題と関連しており、今後も問題として残っていくと言えよう。

③ 各種の国際交流

「数名の日本選手は他国選手とのコミュニケーションをよく取っていましたが(中略)、(一般的には)日本は他国とのつながりが少ない²⁸⁾」という意見があり、また同じ競技の選手同士でも、「入村から帰国時に至るまで一度も言葉を交わすことのない選手」もいたと述懐する者もあった²⁹⁾。選手が他国の選手とパラリンピックを機会にどのように交流を深めるかは、スポーツ関係者のみならず、日本の社会一般の国際意識の問題とも関連していると見ることができよう。

④ 健全者競技団体との共同行動

日本と外国との比較からも、障害者競技団体と健全者競技団体との連携や共同行動の必要性³⁰⁾(そして、個々の選手の立場からすると、健全者の大会への参加の必要性)についての認識が、北京大会を契機にあらためて高まったことが報告書からも窺える³¹⁾。具体的な例としては、走り幅跳び(切断などのクラス)で銀メダルをとった山本篤が、同人の勤務するスズキで「健全者たちと一緒に練習を積む」ことがメダル獲得につながったとの趣旨を述べていることが挙げられよう³²⁾。同時に、北京大会を契機として(それまでも若干行われてはいたものの)、健全者の大会への障害者の参加や合同練習などが一層促進され、それがパラリンピック選手、スタッフに大きなインパクトを与えたとされること(たとえば自転車競技)は、北京大会の「遺産」として特筆できるが、これ

について日本障害者自転車協会関係者は次のように総括している。

健全者オリンピック関係者との連携は小規模であってもアテネ前から続けている。(中略) その大きな例が、6月東京ドームでのサイクルフェスタ2008への招待参加と7月末のオリンピック・パラリンピック合同壮行会だ。サイクルフェスタは、オリンピック選手と同様、我々もデモンストレーション走行を行い、またオリンピック選手と同じ壇上に上がり、同時に紹介を受けた。会場には2万8千の大観衆。またBS日テレで生中継された。多くの人達の前で走り、話をする。それもオリンピック代表選手と同じ舞台で。これは大きな経験であったし、モチベーションは高まった。また、7月末の壮行会は、これまた史上初となるオリンピックとパラリンピック代表への合同の壮行会。選手スタッフの意識はさらに高まった³³⁾。

⑤ 企業との連携

日本選手団から見た場合、北京大会の1つの大きな特徴は、前回のアテネ大会と比べて日本企業の協賛、協力が目立ったことであった。この点を水泳選手団の監督は、次のように記している。

今回のパラリンピックに参加するにあたっては、ミネラルウォーターやチタンネットワークス等を提供いただいたファイテン社、合宿で毎回数百個の菓子パンをご提供いただいた山崎パンの成田様、ゴーグルやサングラスを提供いただいた山本光学社およびソルテック社、その他キリンビバレッジ、セカンドグリッド、兵衛門等々、助成金をいただいた大塚商会など多くの企業、また応援Tシャツを購入いただいたり、ご寄附いただいた個人サポーターの皆様の応援があったことが大きな支えになりました。企業や個人からの支援の必要性は、前回アテネ大会の反省にも記しましたが、今回こうして少しずつですが、実を結んできました³⁴⁾。

他方、車椅子テニスで金メダルをとった国枝慎吾は、「優秀な選手を支援してくれるスポンサーがもっと現れてほしい³⁵⁾」と訴え、同時に「欧米などではスポンサーが増え、賞金も上がっているのに日本だけは逆行している³⁶⁾」と批判している。

なお、北京大会を機に、政府はオリンピック選手への褒賞金にならってメダル獲得者に褒賞金(金メダル100万円、銀メダル70万円、銅メダル50万円)を出すことになったが³⁷⁾、これは、北京パラリンピックの(日本にとっての)「遺産」の1つとも言えよう。

⑥ 報道機関の自覚の進展

北京大会の日本における報道ぶりの特徴、とりわけ従来との相違点の有無については、別途客観的分析が必要になるが、報道機関自体の自覚について、北京大会の際に報じられた例としては、パラリンピック選手の「さんづけ」の問題を含め、パラリンピックについての報道の視角を論じた次の記事が挙げられよう。

パラリンピック選手に10年ほど前、「新聞には呼び捨てで載せて」と頼まれた。日本の新聞は通常、運動記事に載る選手を呼び捨てにする。だが、障害者による「もう1つの五輪」は当時、最高峰の国際大会なのに、運動面にはあまり載らなかった。スポーツ報道に本来欠かせない勝敗や記録を載せないまま、選手名に「さん」や「選手」が付き、話題物として社会面に掲載されることが多かった。

運動面には、トップスポーツを載せる。長い間、障害者のスポーツ活動はリハビリの延長と考えられ、競技スポーツの扱いを受けなかった。では、障害者のスポーツが、“健常者”スポーツに劣るのか。そうは思わない。用具が増えるほど、競技は複雑になるはずだ。例えば、一般のバスケットボールと車椅子バスケットでは、車椅子の操作が加わる方が、実は難しいかもしれない。要は報道機関も含め、一般にはなじみが薄かった。認知度が高まり、最近は運動面にも載るようになった³⁸⁾。

B. 大会運営上の問題点と今後の課題

北京大会がパラリンピックのあり方やその運営の仕方について残した教訓は、大会のいわば見えない「遺産」とも考えられる。日本選手団から見たそうした「遺産」は、同じアジアの都市である東京が2020パラリンピックを主催するだけに、とりわけ意味のあるものと言えよう。

(1) 参加者

日本の場合、障害の重い人々がパラリンピックに参加することは、障害者自身にとっても、また障害者に対する社会意識の向上の点からも意味があるという考え方があるが³⁹⁾、それを実現するには、障害者スポーツへの支援体制が一層充実しなければならないという認識が（選手団報告書全体を通じた印象として）一層深まったことが感じられる。この問題は、パラリンピックのあり方（商業性やメディアへの傾斜傾向など）、ならびにクラス分けの仕方、そして競技種目の選択など多くの次元に関連するが、パラリンピック運動全体のあり方やその理念と関連する極めて重要な問題であることが、あらためて浮き彫りにされたといえる。

(2) 競技場

観客の立場からは、見やすい競技場が多いという意見が一般的であったが⁴⁰⁾、中には、選手が一般観覧席に入れられないため選手用に別途観覧席が設けられたものの、位置が悪く試合の進行状況が分かりにくいケース（ボッチャ）、あるいは控室のモニターが十分でないケース（柔道）などがあったという。

(3) 選手村

日常生活の上で、移動介助などを必要とする人々のための介護スタッフの選手村への出入り及び人数そのものについて、若干問題があったとされる⁴¹⁾。また、視覚障害者同士の相部屋の是非を問う声も出た⁴²⁾。

(4) クラス分け

クラス分けにはいくつかの問題が提起され、今後のさらなる検討課題として浮き彫りにされた。1つは、クラス分けのタイミングの問題である。とりわけ、現地入りしてからクラス分けの変更が行われることについて疑問を呈した人が少なくない⁴³⁾。その一方、「障害によっては症状に波があり、大会ごとにクラス分けを受ける必要がある選手もいる⁴⁴⁾」という意見もあり、複雑な問題であることが一層明らかになった（一例として、水泳の成田真由美は2005年からの3年間に3度クラスの変更を受けており、これについて日本選手団は抗議したが、受け入れられなかった⁴⁵⁾）。

クラス分けの問題について、選手団副団長は次のように総括している。

出場選手の競技クラス決定のタイミングについては、検討が必要と感じました。

今回、日本選手団の中にも選手村入村後に、競技クラスが変更になる選手が出ました。日本選手については、再審の末当初のクラスに戻されたケースと、変更後のクラスに切り替えるケースとがありました。幸い全員が予定していた競技にほぼ出場することができました。しかし、他国には出場できなくなったり、競技での順位が確定した後に失格となったりするケースまでが発生したと聞いています。

選手のクラス分けは、非常にデリケートで難しいものですが、各国での代表選手決定の前に、各選手のクラスは確定するべきではないかと考えます。各国が選手を決定した後や、開催地入りした後、また、競技後にクラスを変更するというようなことは、クラスを変更された選手へ及ぼす精神的ダメージや、選手団の中での選手の扱いなど、図り知れない諸般の影響を考慮すると、すべきことではないと考えます⁴⁶⁾。

この問題については、国際パラリンピック委員会（以下、IPC）のフィリップ・クレブロン会長は、読売新聞のインタビューで、「選手が直前にクラス変更を受けることで生じる落胆や失望は容易に想像できる。（中略）こうした事態を減らすよう、クラス分けをなるべく早期に行うよう指導してゆく」と述べている⁴⁷⁾。

第2の問題としては、スケジュールの問題を越えて、そもそもクラス分けの合理性に対する疑念を生じさせる点もあった。たとえば、アテネ大会マラソン種目覇者の高橋勇市が16位に終わったことに関連して（高橋本人は「調整不足」と自分の不備をコメントしていたが）、次のような指摘がなされ、間接的ながらクラス分けに対する疑念が表現されている。

今大会から視覚障害者のマラソンは、高橋のようにまったく視覚のない「T11」のクラスと、それより障害の軽い「T12」クラスが統合された。一斉にスタートし、ハンディキャップなしに着順がそのまま順位となる。T11の出場者が少ないための措置だが、結果は上位6位までT12の選手が独占した。

障害のため1人で練習をできない高橋。6月からは練習に専念したが、常にガイド（伴走者）を務めるボランティアの都合に配慮しての練習だった。対してT12の選手にはガイドなしでレースができ、1人で練習できる選手も多い。その練習環境の差も結果に表れた⁴⁸⁾。

こうした批判ないしそれに近い反応は、日本以外の国にも見られた。たとえば、アイルランドの選手のケースについて、次のような報道がなされた。

脳性まひ者7人制サッカー予選に8日参加したデレク・マローン（アイルランド）の元にその夜、1通の知らせが届いた。彼の動きが障害を十分感じさせないほど良かったため、出場資格を停止するというクラス分け委の通知だった。

「長いリハビリを続け、激しい練習でようやく動きが良くなったのに」。アテネ大会陸上男子800メートルの銅メダリストは肩を落とす。

同じ障害程度の選手が競うよう考案されたクラス分け。しかし大会直前や最中のクラス見直しで、突如選手の夢が断たれる不条理な事態も頻発している。4年の努力が無に帰す選手のためにも、パラリンピックの魅力とレベル向上のためにも、透明性と判断時期など一層の工夫があっていい。「僕らは頂点を目指し努力しちゃいけない、と言うのか」（マローン）。選手たちに、そう叫ばせてはならないだろう（結城和香子）⁴⁹⁾。

選手への心理的影響は、単に大会開催時の参加や勝敗に関するものだけではない。クラス分けが変われば、かつて特定のクラスで記録された世界記録も、パラリンピック世界記録としては抹消されることになり、そうしたことがもたらす心理的影響は無視できないという声もある⁵⁰⁾。

そもそも、現在のクラス分けの思想は、その根底に競技性重視や簡明性重視の考え方があり、障害の程度に応じた公平性の確保の観点からは問題が生じやすいといえる。以下の記事は、この点を日本選手の例を引きながら論じたものであるが、パラリンピックのあり方（たとえば、競技性の重視や重障害者の除外は、結局のところ記録重視、健常者こそが本来は望ましい姿であるという観念を助長しかねないという意見もありえよう）と直結する大きな課題と言える。

今回は種目数が前回のアテネから1割も減って472となった。日本が得意としていた重度障害者のクラスが削減対象となった。背景には大会が「リハビリの延長」から「スポーツ」へと大きくかじを切っていることがある。競技性が低いことと競技人口が少ないこと。重度障害者のクラスがなくなったのは、こんな理由からだ。

アテネ陸上男子5000メートル（車いす）で金だった高田稔浩（福井）のこの種目は、今回なかった。女子100メートル背泳ぎ（視覚障害）で世界新を出していた秋山里奈（神奈川）も種目がなくなり、自由形に転向して決勝に進むのが精いっぱいだった。

河合純一・日本パラリンピアンズ協会事務局長は「戦いが白熱すれば見る人も増える」と、こんな動きにある程度の理解を示した。

「このままではやめられない。これからも、泳ぐことで何か感じ取ってもらえるように頑張りたい。」競泳女子の成田真由美（神奈川）は悔しがった。選手の障害の程度を決めるクラス分けに泣かされた。

成田は前回7冠。通算20個のメダルを持つ日本のエースだった。今回は軽いクラスと判定されて、これまでより障害の程度が軽い選手たちと戦った。出場した3種目すべてで5位にとどまった。

あるクラス分け委員によると、障害をわざと重く見せて有利なクラスに入ろうとする選手も少なくないという。いかに公平さを保つか、という課題は残されたままだ。成田は「クラス分けが未成熟」と残念がった⁵¹⁾。

(5) 競技ルール、判定など

大会報告書において日本選手団から特に疑問が出された国際ルールとしては、陸上のリレーと卓球に関するものがある。従来バトン方式であったリレーが、両手のない人に

フェアにするという理由からバトンなしになったが、これではリレーの醍醐味の1つであるバトンの受け渡しテクニックが消失する事になり、疑問が残る⁵²⁾。卓球でも、車椅子のクッションの高さや大腿部の上がりの判定などには疑問が呈された⁵³⁾。さらに、自転車の審判団の能力について若干の疑問が呈され⁵⁴⁾、パワーリフティングの反則判定の基準をもっと明確にせよとの指摘もあった⁵⁵⁾。

(6) 観客及びボランティア

柔道や5人制サッカーなどの競技においては、一部の観客の態度に問題があったとする批判もあり⁵⁶⁾、観客の教育やパラリンピック関連スポーツの社会啓発も今後の課題であることがあらためて浮き彫りにされた。

また、北京オリンピック・パラリンピック組織委員会が作成した大会ボランティアのための研修用書物に「視覚障害者は感情を表に出さない」「身体障害者は強情」などの表現があり、差別的表現だとして、書店から回収されるという事件があったが⁵⁷⁾、このことは、中国社会に残る差別意識の表われという側面もさることながら、むしろそうした差別意識を払拭してゆく媒体の1つとしてパラリンピック大会が活用されることを暗示したエピソードと言えよう。

さらに、イラク戦争の米人傷病兵（女子）が、水泳競技に出場して注目を浴びたことや⁵⁸⁾、四川大地震で左足を失った少女が車椅子でダンスを披露したことなどは⁵⁹⁾、パラリンピックが、戦争や災害で障害を負った人々の社会的再起のための触媒となることを目の当りに示したものと言える。

最後に、北京大会について多くの選手、スタッフが賞賛している点は、ボランティアの活躍である。これは特に、言葉の障壁とも関連していようが、北京大会の遺産と言えよう。同時に、言葉の問題に困難を感じた者も少なくなく、特に運転手に中国語しか理解しない者が多かったことについては、問題があったとされている⁶⁰⁾。

2. バンクーバー大会の「遺産」と教訓

A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題

(1) 身体的、精神的側面

バンクーバー大会に出場した日本選手にとっては、他国の選手の競技レベルと比べて、日本の水準がいたく低いことをあらためて認識させられたという面もないではない。たとえば、アイススレッジホッケーの選手の1人は「世界のトップは自分とは別次

元のことをやっている⁶¹⁾」と述べており、また、バイアスロン12.5キロ座位で6位になった久保恒三は、射撃の命中率が9割を越えたものの、それが当たり前のロシア勢とようやくそこに到達することのできた自分との差、さらには、走行で分単位の差がついてしまったことに見られる実力の差を「くやしいけど、満足感はある」と表現している⁶²⁾。しかしながら、全体としてみるとむしろ目立つのは、自らの精神面の強化の必要性についての声である。

たとえば、車椅子カーリングのコーチは、「技術的、戦略的には世界のトップレベルと互角に戦える力があったが、メンタル面の弱さから自分たちの力を試合に生かせなかった大会であった⁶³⁾」と語っている。また、アルペンスキーでは大会を顧みて、監督、選手ともに今後の課題につながるとして「メンタル面の弱点があった⁶⁴⁾」、「今回の経験で精神面において常に自分の滑りが出せる、思い切った滑りが出せるようにしっかり強い気持ちを試合では持ち続けることができるか、ということが課題だとわかりました⁶⁵⁾」と述べている。上に引用したバイアスロンの久保は、バイアスロン2.4キロ追い抜き種目において、普段の実力からみればやや不本意なミスを犯して9位に終わった後、「いつもは1発ごとに集中できるのに、決勝では色んな事を考えすぎた。これがパラリンピックなのですね⁶⁶⁾」と語っているが、これも精神面の問題を間接的に表現したものといえよう。

他方、前回のトリノ大会において、精神面に課題があると強く認識された競技において、バンクーバーで改善を見たと言われる分野もあった。たとえば、アイススレッジホッケーである。具体的には、トリノ大会では試合の時とそれ以外の時との気持ちの切り替えがうまくゆかなかったことの反省に立って、バンクーバーでは「公式練習と試合の合間のオフタイム（との間）のON/OFFの切換をキッチリやった」という評価も見られた。また、選手個人のレベルでも、たとえばアルペンスキー大回転（座位）で銅メダルを手にした鈴木猛史は、前回のトリノ大会での自己の体験と比較しながら、「今日は落ちてレースができたのが大きい。4年間で成長できたかな⁶⁷⁾」と語っている。

次に、しばしば言われる、日本勢と海外勢との基礎体力の差については、バイアスロン12.5キロ（立位）で銅メダルをとった太田渉子が、「(前回のトリノ大会で痛感した)海外選手との体力の差」を4年間の海外留学で克服したと語っていることは⁶⁸⁾、象徴的エピソードと言えよう。

選手の肉体的コンディションについては、大会期間中比較的にケガや疾患が多かったことが注目される。選手、スタッフ53名のうち、(同一疾患で加療した重複を除き)外傷11名、慢性的障害6名、感冒発熱などの内科的疾患36名に上った⁶⁹⁾。その主たる原因としては、(種目数のわりに)「大会期間が短く、予備日をとることができないため、天

候不順の中、半ば強引に競技日程を消化しなければならなかった」ことにあるとの意見もあった⁷⁰⁾。

また、選手の体調との関係で注目されることの1つに、開会式への選手の出席の問題がある。選手団の主将でもあったバイアスロンの新田佳浩が競技に集中するため開会式に欠席したことは⁷¹⁾、今後の課題を提起したものと言えよう。また、5大会連続出場の大日方邦子ですら、体調の管理に困難をきたし、事前合宿を欠席するなど、「本番に間に合わないのでは」と言われるほどの状態だったことは⁷²⁾、パラリンピック選手にとっての体調管理の難しさをあらためて浮き彫りにするものであった。

下記4. の社会環境の問題とも言えるが、日本における一般的な練習、競技環境についてあらためて気付かされた点としては、健常者との合同練習が競技能力の向上に役立ったとされた点⁷³⁾、一年中練習のできる環境に身をおくこと（北欧への長期滞在や夏期の南半球での練習など）の重要性などが挙げられる⁷⁴⁾。また、この点とも関連して、「日本では障害者スキーヤーが滑降を練習できるコースがなく、今大会の公式練習も悪天候で中止となった」ことなど⁷⁵⁾、練習環境の整備が依然残された問題であることがあらためて浮き彫りになった。

なお、障害者スポーツ選手としての基本的意識については、障害を乗り越えての功績を讃えて贈られる「ファン・ヨンデ功績賞」を今大会で受賞したアイススレッジホッケー選手の遠藤隆行が、「(パラリンピック競技を通じ) 障害とは隠すものではなく見せて理解を促すものだ」と気づいた旨を、受賞にあたり述懐していることが注目される⁷⁶⁾。

(2) 用具ならびに関連技術

チェアスキー用具の開発について、アルペンスキーの日本チーム監督は次のように述べている。

チェアスキーの開発要点はチェアフレームと雪質や種目特性に合わせるサスペンション調整機能、それにシートのフィット性とチェアの操作性を高めるシートデザインとフィット感が求められる、ブラクセンタール（ドイツ）の滑りの精度の高さとチェアの座位姿勢に日本シットスキーの大きな違いがある。

【日本型（足伸ばし型）】【欧州型（ブラクセンタールは足屈曲型）】前後の安定感日本型がやや優れているが素早い動きと左右のカービング姿勢や上下の動き・加圧・抜重は欧州型が有利か？研究課題としたい⁷⁷⁾。

チェアスキー用具の技術的改良について、メカニック担当者がトリノ大会とバンクー

バー大会を比較して語った次の感想は、大会ごとの技術的改良の進歩を暗示している。

2006年のトリノ大会まではサスペンションの吸収性は高いが、シートの位置が若干高く、バネが伸びきると、板が雪面から離れることもあった。今回は目線の高さを保ちながらもシートが伸びすぎないように改良し、安定性を増した⁷⁸⁾。

こうした技術的改良は、「ミリ単位でシートの位置がずれるだけで感覚が変わる」(スーパー大回転(座位)の銅メダリスト森井大輝の言)だけに⁷⁹⁾、大きな意味を持つものといえる。

練習用の用具についての重要性も、あらためて明らかになった。左前腕がないノルディックスキーの新田佳浩は、ストックを握る右側に体が傾きやすい点を修正する練習のため、「特殊な器具」を開発して背筋の強化に使用したと言われている⁸⁰⁾。

ソフト技術面については、スキー競技ではワックスマンの技術が重要であることが、あらためて選手本人にも深く認識された⁸¹⁾。

また、別のソフト面の成果も見られた。たとえば、30秒ごとに選手がスタートするクロスカントリーの種目では、選手やコーチに正確な順位や秒差を瞬時に伝え、また、その情報を共有するシステムが大切であるが、バンクーバー大会では「タイムランチャー」というシステムが民間企業により開発され、選手への適切なアドバイスがなされたという⁸²⁾。

なお、そもそも用具の重要性についての認識自体に国際的な違いがあり、日本の認識を深める必要があるとの意見もあったことに留意すべきであろう。たとえば、アイススレッジホッケーの用具マネージャーは、次のように述べている。

他国の用具に関して印象的だったのが、ノルウェーチームです。用具スタッフ2人体制、予備スレッジ10台以上、チームで保有するカーボン製の予備スティック数十本という状況から、用具の重要性に対する認識の高さを感じました⁸³⁾。

(3) 日本チーム全体の組織、運営、体質など

大会におけるチームスピリットについては、団体競技の場合と個人競技の場合とに分けて考察する必要があるだろう。

団体競技、たとえば車椅子カーリングにおいては、初戦のイタリア戦に勝った後、4試合で連敗したため、ノルウェー戦の後、チームのミーティングで相互に率直な意見交換を行って士気を高め、スイス戦に勝利を収めたと言われ⁸⁴⁾、結果は最下位であったも

の、チームスピリットの点では教訓を得たと見られる。

また、個人種目、たとえば滑降（座位）では、先に滑った日本人同僚選手が、「雪質やラインの取り方などを無線で後続（選手）に伝えた」と言われ⁸⁵⁾、日本人選手間のチームスピリットを高めることになった。

現地でのホスト国や他国とのコミュニケーションについては、前回のトリノ大会において問題があったと言われ、その点はバンクーバー大会においては日本側、相手国側双方において改善されたと評価されている。しかし、多少の問題はあったとされ⁸⁶⁾、選手団の英語力の向上が依然課題として残ったものとみられる。

なお、日本チームの体質については、アイススレッジホッケーなどが典型であるが、他国のチームに比べて平均年齢が高く、また競技人口の少なさからくる選手層の薄さが問題とされている⁸⁷⁾。

(4) 社会的課題

日本選手団の目から見てより社会的に広い範囲へのインパクトがあったとみられる事柄の1つに、報道環境の変化がある。NPO 法人 STAND が、バンクーバー大会の競技を連日ネット上で報道するという新しい試みを始めたが、これは、いわゆるインターネット・メディアの活用という点で新しいステップと言えよう。

教育面では、選手の出身地の学校の生徒たちが選手の活躍を目の当りにして、「逆境を乗り越え、夢に向かって挑戦することの大切さを生徒たちに教えてくれた⁸⁸⁾」という声も上がったことが注目される。

また、障害者へのスポーツの普及という面では、スーパー大回転（座位）で金メダルを取った狩野亮の活躍などにより、スキー協会の関係者から「スキーという競技が健常者だけのものではなく、幅広い人たちのスポーツだということを実証してくれました」という評価も出た⁸⁹⁾。

市街地のバリアフリー化については、選手たちから、バンクーバーの路線バスや飲食店などがほとんど例外なく障害者に配慮したものになっていたことに高い評価の声が上がり、この体験が日本社会のバリアフリー化に役立ってほしいという意見も聞かれた⁹⁰⁾。

なお、バンクーバーではパラリンピックの前年に国際障害者ピアノフェスティバルが開催されたが、それに出場した日本人アーティストと日本のパラリンピアンとの交流も行われ、障害者スポーツと障害者芸術のいわば融合の機会ともなった⁹¹⁾。

B. 大会運営上の問題点と今後の課題

(1) 選手村

選手村について、これが1カ所ではなく、分散されていたことに不便を感じる者もいたほか⁹²⁾、前後でも述べているように競技スケジュールにかなり無理があったとの問題が提起されている。

また、選手村の部屋について、家具や備品のない部屋に宿泊させられた選手がいたとの問題もあった⁹³⁾。

(2) 競技規定

加えて、日本から見て若干問題があると考えられた事項の1つは、競技規則改正のやりかた、とりわけ、そのタイミングである。一部の競技において、規則の改正が急に行われ、しかもそれが、競技大会の比較的間近な時期に行われたため、日本選手団にとって、対応に困難を来した例があった。これは、見方によっては、そうした国際的な規則改正の動きについての情報を事前に把握できなかった日本側の情報収集体制なり、国際活動への参加程度に問題があったという側面もあったと考えられるが、建前としては、規則改正のやりかたの公平性、透明性の確保は、パラリンピック全体の課題であろう。

具体的には、バイアスロンについて、日本チームの監督から次のような指摘がなされている。

バイアスロンの片腕選手が使用するライフル銃にジョイント部分を取り付け、サポート台と一体化して良いというルール改正が試された。ドイツが考案しIPC（注：国際パラリンピック委員会）が認めた部品で、日本チームも購入は本番に間に合ったが、使いこなすまでには至らなかった。これは、手を離してもライフルが固定されているので、より命中率の精度を上げてしまっている。一部の国が考案し、すぐさまルール改正されることには反対である。一定期間のテスト期間を設けるべきである⁹⁴⁾。

(3) メディア対応

また、バイアスロンなどで、テレビ映りの関係から選手のみが入れ、コーチが入れないゾーンが従来に比べ大きく拡大されたため、コーチがコースに近づけず、タイムチェックによる指示や予備ボールの用意などができなかったという問題が提起されているが⁹⁵⁾、競技環境の充実とメディア対応のバランスの問題として見ると、パラリンピックのあり方につながる課題と言えよう。

(4) 日程変更

加えて、日程の変更問題があった。「13日の滑降中止で予備日がなくなり、大会期間中に全競技を消化するため、悪天候でも実施可能な回転系を序盤に、滑降などスピード系を好天が予報される日に入れ替えた」のであった⁹⁶⁾。天候のせいでのやむを得ない措置とはいえ、そのため選手に負担や困難が生じた。たとえば、「あまり得意ではない」回転競技が初日となったにもかかわらず銅メダルを取ったベテランの大日方邦子は⁹⁷⁾、レース後に、「パラリンピックは種目が増え、日程が詰め込まれてしまっている。今回を教訓にして、今後予備日を増やすなどのスケジュールを検討してほしい」⁹⁸⁾とコメントしている。また、なかには、日程変更のため結局、競技に出場を断念せざるをえない選手もいた⁹⁹⁾。

(5) その他

「日本を強くするためには、アジア全体での（パラリンピック競技の）普及・強化が必要である¹⁰⁰⁾」との声が上がったが、これは、パラリンピックへの出場権を獲得するためには、国際大会での実績が必要であるという側面もさることながら、「アジアにライバルを作ることによって、日本チームの強化につながる¹⁰¹⁾」という観点や、国際的コミュニケーション能力の強化にも関係するものと言えよう。このことから、国際的パラリンピック活動において地域ごとの組織や大会の奨励が重要であることが、あらためて浮き彫りにされる。

3. ロンドン大会の「遺産」と教訓

A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題

(1) 競技能力およびその関連

ロンドン・パラリンピックに出場した選手あるいはコーチ陣にとっての最大の教訓は、多くの競技における日本と世界の競技水準の乖離であった。

選手団報告書では「陸上競技では世界との差を嫌と言うほど痛感させられた¹⁰²⁾」とされ、水泳でも「一定の成果は上げたものの、世界の急速なアスリート指向には遅れを取っているのは手に取るようにわかる¹⁰³⁾」と評価されている。この点については、個々の選手の発言の報道も少なくない。たとえば、陸上男子200メートルで、自己ベスト（26秒72）に近い成績を出しながら9人中8位におわった山本篤は、「周りが驚くほど伸びている¹⁰⁴⁾」とコメントしている。また女子では、100メートルに出場して8人中7位に

なった高桑早生（さき）は、「世界の先頭は遠かった¹⁰⁵⁾」と述懐している。

陸上競技や水泳ばかりではない。車椅子バスケットボールについても、「日本代表全体のレベルが世界の急速な（中略）発展スピードに追いついていないと感じる部分の多い¹⁰⁶⁾」とされている。

これらすべての印象ないし教訓は、水泳で6大会連続出場した河合純一の言葉、すなわち「日本が各駅停車から急行になったと思ったら、世界はリニアの感じ¹⁰⁷⁾」に集約されている。

競技によっては、その競技自体の能力もさることながら、基礎体力の面での問題を指摘する者もいた。たとえば、ウィルチェアーラグビーである。そこでは、トレーナーの1人が、「日本の選手は日常生活における体力面も他国より劣っていることを実感した」と述べている。同じように柔道でも、あるコーチは「基礎体力が足りない」と指摘している¹⁰⁸⁾。（もっとも、この点はつとに認識されていたことであり、北京大会後、腕の筋肉トレーニングを開始し、ロンドン大会では「背筋肉の動かないローポインター《重症者》の2桁得点はすごい」と評価された車椅子バスケットの藤井新悟のようなケースもある¹⁰⁹⁾。）

いずれにしても、こうした「世界との差」についての認識こそ、ロンドン大会が日本に残した最大の「遺産」であるといっても過言でないほどである。

第2に、競技能力そのものとは別に、選手や関係者の中で自己反省にも似た認識あるいは再認識として強く感じられたことは、かなりの日本選手に精神面におけるもろさ、弱さがあるという点である。

「男子選手については、技は世界一だと思います。（中略）では、なぜメダルが取れないのか。一言で言うと精神面の弱さだと思います¹¹⁰⁾」。柔道のコーチの1人は、ロンドン大会に参加した後、今後の課題としてそう述べている。精神面のもろさは、コーチのみならず選手自身の反省の言葉としてもしばしば述べられている。なお、こうした精神面の問題を克服した例として、知的障害100メートル平泳ぎでメダリストとなった田中康大の体験談があるが¹¹¹⁾、メンタルケアの重要性をあらためて浮き彫りにするものであろう。

他方、今回の大会を通じて、いくつかの競技で「勝利へのコツ」とでも言うべきものをあらためて感じ取った、あるいは実践した例も少なくない。

たとえば、視覚障害者の柔道では、組んだ状態から試合が始まり、常に競技者がお互いに接触しているため、体力の消耗が激しいので、勝つためのカギは、「一本勝ちを重ねて、体力を温存した状態で勝ち進んでいくこと」にあるという認識が、競技者の共通認識となっていたとみられる¹¹²⁾。

女子100メートル背泳ぎ（視覚障害）で金メダルをとった秋山里奈は「フォームを見直し、手のひらをしっかり水にのせるようにする」ことによって、1かきで進む距離を伸ばす工夫を行い、更にターンの仕方を変え、水中で素早く前転する方法を取得して、タイムを縮めた¹¹³⁾。

また、両腕のない水泳選手として知られ、100メートル平泳ぎで銀メダルをとった中村智太郎は、従来膝をねじるようなキックをしていたため膝の半月板を損傷した体験をふまえ、キックを直線的なやり方に変えた。前回の北京大会では25メートルで7、8回だったキックを今回は6回に減らし、伸びやかな泳法を完成して、北京の記録から3秒以上タイムを短縮した¹¹⁴⁾。

体の調整方法という点に関して、減量の問題がある。たとえば柔道66キロ級で4位になった廣瀬誠は、北京大会では減量に努力して60キロ級に出場したが、筋力トレーニングが進むほど、脂肪分が減るため減量に無理がかかることから、「無理な減量」はしないと決意して今大会に臨んだという¹¹⁵⁾。

一方、団体競技では、日本特有のチームスピリットなり団結心の発揮が勝利に導いたという例もみられた。たとえば、金メダルを獲得したゴールボール（女子）では、監督が「仲間を信じる力の強さは他のどの国にもない¹¹⁶⁾」と断言している。

この他、相手チームを研究することの重要性や、コースのていねいな下見の重要性に関する指摘もみられた。前者については、たとえばゴールボールでは、「決勝で対戦した中国の手の内は研究し尽くしていた。（3人の選手の内）センターの選手が広い範囲を守ろうとするため、両サイドの選手との間に『すきま』がひろがる。（中略）センター選手の守備範囲ギリギリのところをイメージしてボールを投げ、狙い通りゴールを決めた¹¹⁷⁾」という。

また、下見に関する次のような意見は、もっと多角的に徹底して下見を行うべきとの考えにつながるものであろう。（視覚障害男子マラソンについて）「下見は3回していた。だがレース中、急に日差しが強くなったのが誤算だった。日なたと日陰のコントラストがきつく、曲がり角を曲がって日陰に入った途端、弱視の目には何も見えなくなる。32キロ付近では転倒¹¹⁸⁾」したという。

また、視覚障害の陸上種目では、伴走者（ガイドランナー）の重要性は常に指摘されるところであるが、伴走の方法に工夫を加えた例もある。たとえば、女子100メートル、200メートルの伴走者として活躍した近藤克之は、「今年5月にプレ大会でロンドンに視察に行ったとき、外国のガイドランナーから『ひも』だけでなく、選手のひじと肩の動きを同調させることを学んだ¹¹⁹⁾」とコメントしている。また、練習段階で伴走者の確保に特に意を用いたことについて、陸上男子5000メートル（視覚障害）に出場した和田

伸也は、次のように述べている。

練習にも伴走者が必要だ。市民マラソンで知り合った地元京都のランナーから次々と携帯のアドレスを聞き出した。平日1時間の通勤時間、30人以上にメールして伴走を頼み、週1、2回だった練習日が毎日になった¹²⁰⁾。

(2) 用具

ロンドン大会は、用具の重要性を再認識させる契機でもあった。たとえば、義足については、高桑早生の義足を担当したのは上毛義肢社の高橋将太社長であったが、「妥協のないユーザー」であった高桑に、高橋は「これほどうまくいったケースはほとんど経験がない」と漏らすほど、選手の要求に合う義足を製作し、高桑の走行に貢献した¹²¹⁾。これも高橋が義足製作25年の経験を持ち、義足について深い見識を持っていたからである。そのことは、有名な義足ランナーのピストリウスにブラジルのオリベイラが勝ち、ピストリウスがオリベイラの義足が長すぎると批判したことに関して、同人が、長いことが必ずしも有利になるとは限らず、義足が長すぎるとバランスが崩れ地面からの蹴り返しを制御できず走りにくくなると述べたことにも表れている¹²²⁾。

また、車椅子については、車椅子の設計、製造、販売を行っているオーエックスエンジニアリング社が、完全なオーダーメイドでは時間もコストもかかりすぎるが、さりとて各選手に特有のものを作りたいと、車椅子を数ブロックに分けて幾種類かの複合部品化を実現し、その組み合わせを変えることによって、各人の特性に合わせる方法をとるようになったという¹²³⁾。こうした方法も、パラリンピックに関与するようになったことから生じた間接的「遺産」といえよう。

(3) プロ化への刺激

パラリンピックは一部の選手にとって、職業運動選手、すなわちいわゆるプロ化への大きな刺激となった。たとえば陸上（車椅子）の廣道純は2004年のアテネ大会を目前にして、勤務先を退職して企業とスポンサー契約を結んでプロに転向したが、ロンドン大会の前には「収入源だった講演会の回数もへらして練習に専念¹²⁴⁾」した。本人によればそれもプロとしての使命感によるとされ、パラリンピックが選手のプロ化の触媒となっていることが窺える。

(4) 選手団の運営、組織

選手団の運営面での教訓の1つは、選手団内部の情報共有の問題であった。たとえば、

陸上競技のヘッドコーチは、全ての情報を共有しようとしたことがかえって混乱を招いたことを反省するとし、重要な情報を正確に伝えるような情報管理体制の整備の必要性を訴えている¹²⁵⁾。

また、競争相手の外国についての情報、あるいはその能力一般についての情報入手が十分でないとの声が、ゴールボールやウィルチェアラグビーなどの分野で聞かれた¹²⁶⁾。さらに日本国内においても、データ整備の必要性が叫ばれた分野がある。たとえば、伴走者のデータである。あるガイドランナーは次のように示唆している。

今回の経験をさせてもらいわかったことは、選手たちの能力は高いが、伴走者の確保の問題で練習スケジュールが組みにくく、効果的な練習ができていないということ。また、彼らのレベルが上がればそれ以上に高いレベルの伴走者が必要と考えられる。盲人マラソン協会では伴走者のリストアップや登録制によるネットワーク作りをすることで、(中略)記録のレベルアップにつながるのではないかと¹²⁷⁾。

(5) 社会的課題

① 障害者スポーツをめぐる体制一般

外国と比較して、まず国の関与の程度が低いという点が指摘されている。この点については、選手団長自ら次のように言っている。「国を挙げての強化を進める外国選手たちとの練習量の差が現れた¹²⁸⁾」と。また競技団体間のつながりの不足が、選手の発掘、指導者の養成、指導方法の確立などの障害になっているとして、「障がい種別の競技団体の横の連携を深めること¹²⁹⁾」、さらには、団体の組織的統合を図るべきとして、「盲人マラソン協会、知的障害者陸上競技連盟及び聴覚障害者協会がそれぞれ独自の活動をするのではなく、陸上競技発展のためには組織の統一も考える時期に来ている¹³⁰⁾」という意見も生まれてきている。

また、現在の特別支援学校の体制では競技力の高い選手の育成は困難であるとして、特別支援学校と各県における障害者スポーツ機関との連携を深めることが提案されている¹³¹⁾。

さらに、競技団体のガバナンスについて、あらためて問題提起が行われている。すなわち、「競技団体の多くが、専用事務局や専任スタッフを持たず、ボランティアとして組織運営を分担して何とか組織運営が成り立っている¹³²⁾」実情を改善すべきという声が上がっている。

② 練習環境

大会に至る過程での練習環境については、ロンドン大会を1つの契機として、たとえば、男女の協力や健常者と障害者との合同練習などが一部とはいえ実現したことが注目される。

男女の協力については、ゴールボールのヘッドコーチが「少人数であった女子強化スタッフに（中略）ゴールボール男子チームの協力を得ることができた¹³³⁾」と述懐している。また、自転車競技では次のような体験が語られている。

オリンピック代表やジュニア代表チームなどと協力関係を持ち、合同で合宿を行い、お互いのチームで色々な選手・監督・コーチと場所を共有し、それぞれのトレーニングを見て刺激を受け、学ぶこともありモチベーションも上がっていきました¹³⁴⁾。

③ 企業の関連

所属選手に対する企業の姿勢については、日立建機の工場に勤務しながら、自転車競技で銅メダルを獲得した藤田征樹に関して、支援者の1人から「長期間の海外遠征でも理解を示してくれた勤務先の協力があったからこそその成果¹³⁵⁾」という声がある一方、「選手団関係者からは、『障害者自立支援法』で仕事を休むのが難しくなり、選手が遠征や合宿に参加しにくくなっているという声も上がっていた¹³⁶⁾」。

また、選手への企業スポンサーについては、ロンドン大会での活躍で「スポンサー契約への道も開けた」という選手もおり¹³⁷⁾、さらにアテネ大会を契機に誕生した企業によるユニークな選手支援システムを構築した福岡県のアソウ・ヒューマニーセンターは、ロンドン大会を通じてさらにその支援の環を広げることに成功したと言われる。このシステムについては次のような報道もなされている。

長引く不況のあおりを受け、スポーツ選手への資金援助を削減する企業が全国で相次ぐ中、同社は企業や個人に複数競技の選手を支えてもらうスタイルを初めて確立した。

そのユニークなシステムとは――。年会費は企業36万円、個人1万円で、会員企業の社員や個人会員に、選手らが「ヘルスキーパー」としてマッサージしたり、時に講演するというもの。この取り組みが話題となり、会員は現在、県内外の約50社、個人も400人弱に上る。選手たちは平日午後2時までの約4時間、マッサージや営業などをこなし、その後練習に励む¹³⁸⁾。

④ その他

ロンドン大会が日本社会一般に与えた影響のうち、第1に挙げられるべきは、選手の出身地を中心とする地方の共同体、自治体に与えた影響であろう。従来から地元出身の選手を表彰する動きは存在したが、とりわけロンドン大会後は地方自治体が特別な表彰を行う例が相次ぎ、なかには特別な荣誉賞を設ける動きも出た。たとえば、兵庫県南あわじ市は、地元出身の柔道（視覚障害）100キロ超級で金メダルを獲得した正木健人に対し、従来の表彰の上にさらに特別の「スポーツ市民荣誉賞」を授与した¹³⁹⁾。

第2に、高齢者へのインパクトがあった。たとえば、男子円盤投げに出場した大井利江（64歳）は、地元岩手県の70歳の女性が「世界の舞台によくぞ行ってくれた」という言葉を吐くほどの感動を与えたとされる¹⁴⁰⁾。

第3に、大会はスポーツ以外の分野の人々のパラリンピックスポーツへの「参加」意識を高める触媒となった。たとえば、パラリンピック水泳日本代表のウェアのロゴマークをデザインした高校生は、「デザイン採用をきっかけに、パラリンピックが身近になった」と述べている¹⁴¹⁾。

第4に、知的障害者の参加が数年のインターバルの後にロンドン大会で復活したことから、知的障害者が「試合などで荷物の整理ができるようになり、自宅で洗濯物をたたむようになった¹⁴²⁾」といったことに加え、一般人の「知的障害者への理解が進む」契機となるとの声も上がった¹⁴³⁾。さらに広い意味では、障害者への社会の目線についての自己反省の契機となった。たとえば、パラリンピックを報道した日本人ジャーナリストのなかには、みずから障害者の目でロンドンの各種設備を見学し、鉄道の切符の発券機の位置が高く、車椅子の人には使いにくいことなどにあらためて気づいたことや¹⁴⁴⁾、義足のランナーとして著名なピストリウスがロンドンでは自分の義足をじろじろ見られなかったと発言したことに触発され、「障害者への見方を変えていきたい¹⁴⁵⁾」という少年の投稿があったことが挙げられよう。

こうした社会意識の変化は、障害者アスリートに対する賞嘆の表現の変化にも表れた。たとえばある高校生は、障害者の水泳選手に対して、従来「えらいね」と言っていたのを、「すごいね」に変えたという¹⁴⁶⁾。

こうした意識の変化は、観客としての障害者の重視という姿勢とも関連していた。ロンドン大会では視覚障害者ツアーが組まれたが、このツアーについては次のような報道がある。

東京の旅行会社クラブツーリズムが主催し、全盲と弱視、同伴者の計20人が参加。入場行進で日本選手団が登場すると、日の丸の鉢巻きをした参加者らは客席から立ち

上がって声援を送った。国立民族学博物館（大阪府吹田市）准教授で全盲の広瀬浩二郎さん（44）は「国ごとに観客の反応が異なり、違いを聞き比べていた。スタジアムを埋め尽くした観客の声援が振動となって体に伝わり迫力満点だった」と興奮気味に語った¹⁴⁷⁾。

最後に、ロンドン大会はじめ主要な障害者スポーツ大会を特定の社会運動のアピールの場として活用せんとする動きも見られた。とりわけ、障害の原因の1つと見られる現象に対して警鐘をならすことは、大会自体では禁止されるものであっても、有意義なパラリンピックの「遺産」とも言えよう。たとえば、自らはオートバイ事故で背骨を損傷、加えて息子を飲酒運転の車にはねられ失った車椅子陸上の山本浩之は、自分のヘルメットと車椅子に「STOP! 飲酒運転」と書いたステッカーを貼ってレースに臨んだという¹⁴⁸⁾。

B. 大会運営上の問題点と今後の課題

(1) 物理的環境や条件

ロンドン大会の競技場や選手村の施設については、選手村が3カ所に分かれていたため（ロンドン市内、郊外、それに約3時間離れたウェイマス）、選手団全体としてはさほど不便がなかったものの¹⁴⁹⁾、ロンドンから離れて滞在したセーリング関係者にとっては不便があった¹⁵⁰⁾。この点は、単に関係者間の連絡など利便性の問題だけではなく、中心会場から相当離れたところに滞在する選手や関係者が、開会式などの行事にどこまで参加すべきかの問題（そのため練習時間などが犠牲になることなどの問題）を提起するものであった。

また、選手村の位置の問題の他に、練習会場の場所の問題があるケースもあった。たとえば、シッティングバレーでは練習場が遠く（交通渋滞になると2時間半かかり）、選手のコンディションに影響した¹⁵¹⁾。

選手の宿泊施設については、重度障害者対応などを考えると、選手の宿泊施設におけるベッドの高さ、トイレの背もたれの有無など、部屋の使用についての情報を事前に周知せしめる必要も感じられた¹⁵²⁾。

(2) スケジュールおよびその関連

ウィルチェアラグビーや一部の陸上種目は、夜9時を過ぎてから試合が行われ、選手の日程管理上困難があった¹⁵³⁾。通常は夜間に試合が行われない競技について、大会でかなり夜遅く競技を行うことの是非は、検討されるべき問題であろう。

(3) クラス分け

特定の競技におけるクラス分けの合理性について、ロンドン大会の日本選手団報告書で問題が指摘されているケースとしては、たとえばマラソンがある。視覚障害者マラソンでは、伴走者なしでは走れない走者と、伴走者なしで走れる弱視者とが同じカテゴリーとして競争するが、それが果たして合理的か、疑問視する向きもある¹⁵⁴⁾。

また馬術の場合、下半身が完全にマヒしている者と杖で歩ける人が同じクラスで競争することについても、(クラス分けの複雑さや出場者の数などを勘案した結果として)競争者自身はやむを得ないと感じているとしても、合理性の観点から問題を指摘する向きもある¹⁵⁵⁾。

さらに、障害の程度が相当違うチーム同士が戦うことについての公平さの問題も存在した。たとえば、セーリングでは、メダル獲得国はすべて障害度が全体として低い(ポイント13ないし14)のに対して、日本の場合は非常に高く(ポイント9)¹⁵⁶⁾、そうした違いは各国の選手層を厚くすることで克服できると考えるべきか、あるいは試合結果になんらかの考慮を付加すべきかの問題は、依然残っている。

クラス分けの基本的なやりかたについて問題を提起する声があったことにも注意しなければならない。1つは、タイミングの問題である。ロンドン大会では、「大会直前の測定で40選手がクラス変更になったと言われ¹⁵⁷⁾」、女子100メートル自由形世界記録保持者のアメリカの選手が抗議したこともあって、国際的注目を浴びた。さらに、日本選手のなかには、いわゆる機能的クラス分けが真にフェアなものであるか疑問を呈する者もいる¹⁵⁸⁾。クラス分けの仕方について選手自身が納得するような啓発活動もさらに必要であろう。

(4) 介助者、伴走者、ボランティアの扱い

介助者の扱いで特に問題となったのは、選手村への入村に関する制限である。パラリンピックの場合、こうした制限についてオリンピックとは異なる扱いが必要であるとの意見も出たが¹⁵⁹⁾、必要性和安全規制のあり方についてさらに検討が必要であろう。

また、伴走者については今大会からメダル授与の対象になったものの、選手が複数の伴走者を登録した場合にはその対象とならないことについて問題提起をする向きもあった¹⁶⁰⁾。

ボランティアには通常、特別の観戦機会を与えられていないが、パラリンピックにおけるボランティアの役割の重要性にも鑑み、観戦機会の提供は今後検討すべき課題として残されている¹⁶¹⁾。

(5) 観客への対応

今大会では選手の家族、友人に対して、特別の観戦チケット（AF& Fチケット）が割り当てられたが¹⁶²⁾、今後この方式が継続されるのであれば、事前申し込み分と現場での申し込みをはじめとし、手続きの明確化と各国の国内委員会の役割を定義しておかなければならないであろう。

(6) ドーピング対策

ロンドン大会ではドーピング違反件数が4件にとどまったが、大会中の検査がなかったことや、そもそも503種目、1,522のメダル数に比して検査件数が1,250であったことは、ドーピング対策の遅れを示すものであるという意見もあった¹⁶³⁾。

(7) その他

上記(1)～(6)に含まれない、実務的、あるいは考え方の上で2020東京パラリンピック大会準備に特に参考となるべき点としては、例えば入力ミスの問題がある。パラリンピックの入賞者は、目に見える単純な結果だけではなく、記録に障害の程度などの係数を乗じた上で順位が決まるため、そうした係数の入力是十分慎重に行う必要がある。このことは、ロンドン大会において、入力ミスによるメダルの取り消しや変更が行われたこと¹⁶⁴⁾からも裏づけられるところである。

また、ロンドン大会に限られないが、多くの開発途上国の国々の選手がパラリンピックに参加するようになればなるほど、優れた用具や車椅子を持ち合わせない選手もふえる。その結果、いわゆる修理所の役割が大きくなる。ロンドンの修理サービスセンターで仕事をした日本人技術者中島浩貴は、メキシコ的女子バスケットボール選手が持ち込んだ車椅子を修理して「よくこれで競技を続けてきたな」と思い、選手に尋ねると、「ひと月前にスポークが折れたが国内では修理してもらえず、そのまま練習を続けていたところ2本目が折れた。別の車いすも用意できず、このセンターに持ち込んだ」との話であったという¹⁶⁵⁾。2020東京大会でも、こうした開発途上国あるいは十分な用具の調達が困難な国からの選手に対する現場での支援のあり方は、検討すべき課題であろう。

次に、ロンドン大会の特徴の1つとして（少なくとも日本人から見た場合）一部の競技場の雰囲気は極めて楽しげでお祭り気分であったことが挙げられる。たとえばアーチェリーは、北京大会以来「お祭りのような雰囲気」¹⁶⁶⁾があったとされ、競技進行のアナウンスにはコマーシャルもたくみに交ぜられていたと言われるが、こうした競技場の雰囲気作りをどう考えるかも課題であろう。

競技場の雰囲気の問題とも若干関連する事柄として、選手の試合態度の問題がある。

柔道の正木健人は、健常者柔道を含めロンドン大会の柔道で金メダルをとった唯一の日本人となったが、正木は『『礼節を重んじる柔道の精神』を示そうと、表情を変えずに相手選手と両手で握手を交わした¹⁶⁷⁾』。こうした選手の態度は、日本にとってロンドン大会の隠れた「遺産」と言えよう。

また、ある種の政治的に象徴的な行為に、ロンドン大会が活用された例も無視できない。とりわけ日本から見た場合、北朝鮮がパラリンピックに初出場したことは注目に値する。そして、ただ1人の選手（水泳男子50メートル自由形のリムジュヨン）の脇で国旗を掲げて開会式で行進した女性は、脳性麻痺の息子を持ち北朝鮮の障害者体育協会の書記長であり、かつて日本で行われた世界卓球選手権大会で女子団体1位となった南北統一チーム「コリア」の一員だったリブンヒだったという¹⁶⁸⁾。

最後に、ロンドン大会の「遺産」として何といても大きい事柄の1つは、英国選手団の事後のパレードがオリンピック選手だけでなく、パラリンピック選手をも含めて行われたことであろう。これは、主催国であるため、選手の日程がバラバラになる前に多くの選手を集めることができたという事情もあろうが、少なくともホスト国においては、パレードなどの機会には、オリンピック選手とパラリンピック選手を合流させることが望ましいことを、世界にあらためて示したものと言えよう。

4. ソチ大会の「遺産」と教訓

A. 日本選手団への教訓と日本社会の課題

(1) 選手の精神面及び肉体系

肉体系については、選手、コーチ、スタッフなど総勢55名の日本選手団のうち、加療を受けた者はのべ37名であったが、大きなケガはなく、特に雪の状態の悪化のため多くの転倒者が出たスキー競技において日本選手には大きなケガがなかったことが特筆されている¹⁶⁹⁾。これは逆に言えば、かつての大会においてケガに泣いた選手がかなり存在したことを暗示しており、この点について改善がなされたことを示唆していると言えよう。

他方、精神面では、「不安と緊張で身体がかたくなってしまった¹⁷⁰⁾」、「ここぞという時の勝負強さを発揮できない精神面の弱さを痛感した¹⁷¹⁾」といった反省の声が聞かれた。この背景としては、ソチ大会では、初出場の選手が半数を占めたため、試合の際もさることながら、練習、滞在など生活一般に緊張があったことも影響していたと考えられる¹⁷²⁾。他方、精神面の欠陥を「これまでの自分の甘さ」と表現している選手もあり¹⁷³⁾、かならずしも、初出場に伴う緊張感のみが原因ではないことも示唆されている。

また、報道を分析する限り、練習や日常生活において、(過去の反省に立って)精神面の鍛練や激励が役に立ったとする例も1, 2にとどまらず、過去の経験が精神面で生かされたとする例も散見される。たとえば、バイアスロンの佐藤圭一は、バンクーバー大会では「頑張らなきゃいけない」という思いが空回りしていたという反省から、ソチ大会では「コーヒー豆をひいて一服する時間を作るなど、自分なりにリラックスを心がけ」た旨を述べている¹⁷⁴⁾。また、男子アルペンスキー回転(座位)で金メダルを獲得した鈴木猛史は、常日頃から先輩に「お前が一番早いんだから大丈夫だ」と言われてきたことが、成績の安定につながったと述べている¹⁷⁵⁾。

なお、精神面の問題については、選手本人もさることながら、周囲の人々(たとえばコーチあるいは支援者)が、この点を強調する場合があることに注意を要しよう。たとえば、クロスカントリースキーの1キロスプリントフリーに出場した新田佳浩が、準決勝で敗れた後に他の種目に出場するにあたって、中学生時代まで指導してきた宮崎薫氏は、「技術的な面はこれまでで最高の状態だったと思う。あとは精神面。開き直り、次の種目に挑んでほしい」とコメントしている¹⁷⁶⁾。

日本選手の競技能力については、アルペンスキーの場合では指導者の間に、一般的に言って「日本選手の技術力は他国より高い」という自負があり¹⁷⁷⁾、そのことはアルペンスキー競技での金メダル獲得によっても証明されたと言える。また、一般的な水準ではなく、特定の選手の特定の「技術」が勝利を呼び込んだという側面も存在する。たとえば、上に引用した金メダリスト鈴木猛史の技術について、次のような解説が報じられている。

スキーのストックの代わりに使うアウトリガーを使って旗門のポールを倒しながら、最短距離でターンしていく。「逆手」といい、健常者の世界ではごく普通に使われるが、座位で使いこなせるのは鈴木くらい。スピードが上がらない上、ターンの角度が厳しくて数も多い回転で、その効果は極めて高い¹⁷⁸⁾。

その一方、アルペンスキー以外の競技を中心に、日本選手の競技能力が世界から取り残されつつある点を指摘する者も相次いだ。たとえば、バンクーバー大会で2種目優勝を果たした新田佳浩は、クロスカントリースキー男女混合10キロに出場したが、「トップ3に付け入る隙も無かった」と言い、「世界はどんどん進んでいて、次の目標に向けて考えなければいけないターニングポイント¹⁷⁹⁾」と述べている。また、距離5キロ(座位)に出場し21位に終わった江野麻由子は、「全力を出したが、それでも世界に追い付かないというのがよくわかった」と語っている¹⁸⁰⁾。こうした点を、冬季パラリンピッ

クに5回出場経験のある大日向邦子は、アルペンスキー以外の競技を見た感想として「(世界の)信じられないほどのパフォーマンスの高さに驚きます。(中略)私が最初に出場した94年のリレハンメルの際は、まだアットホームな雰囲気があった。今は競技性が高くなり、アスリートのレベルが上がっている」と、間接的表現ながら、日本の競技レベルについての危機感を述べている¹⁸¹⁾。

技術能力そのものの問題というよりも、それを100パーセント引き出すための方策の1つとして、チームワークの良さを指摘する声もあった。たとえば、スーパー大回転(座位)種目での日本選手のメダル獲得に関連して、先行した選手が、コースの状態を無線で後続の選手に伝えて注意を促すというチームワークがメダル獲得につながったという声も上がっている¹⁸²⁾。

(2) 用具及び関連技術

用具や関連技術面の問題については、いくつかの面で日本の特徴が生かされたとの声が聞こえた。

1つは、いわゆるシットスキーの「椅子」をめぐる技術である。これには、選手の体型に合わせたデザインの工夫といった構造的なもの、素材にまつわるものがあり、前者については空気抵抗を少なくするための風よけ¹⁸³⁾や地表とスキーとの間のショックをできるだけ吸収するようなデザイン¹⁸⁴⁾などの工夫があったとされる。後者については、金属の軽量化のため鉄の代わりに全部アルミ製にする工夫¹⁸⁵⁾、特殊なプラスチックの活用¹⁸⁶⁾、ボーイング787航空機にも用いられる特別なカーボンの使用¹⁸⁷⁾といった工夫がなされた。

もっとも、こうした日本の技術的優位については、「日本製のチェアスキーを使う海外チームも多く、日本のアドバンテージはなくなっている」という声も出てきている¹⁸⁸⁾。そして皮肉なことに、日本企業が海外において開発した技術が、海外の選手に使用されるケースも登場している¹⁸⁹⁾。

用具そのものではないが、スキーにおけるワックス技術の重要性をあらためて指摘する声も上がっている。たとえば、ソチ大会での日本選手団のワックスコーチは要旨次のような体験を語っている。

雪質は天候や気温、湿度などで変わる。時間帯によっても変化するため、レースの状況を予想し、その雪質に合ったワックスを使ってスキー板を仕上げる。

粉状、液状、固形など数百種類のワックスを持ち込み、厚く塗ったり、薄く塗ったり。手の感覚だけを頼りに、レース直前まで作業するときもある。暖かく緩んだソチ

の雪は特に難しく、何十回もテストを繰り返した¹⁹⁰⁾。

さらに、ソチ大会会場での競技においてではなく、むしろその練習過程で技術開発が行われた例として、次のような事例が伝えられている。

太田選手が所属する日立ソリューションズ・スキー部では昨年、同志社大学スポーツ健康科学部（京都府京田辺市）と協力し、ソチ大会のクロスカンントリーコースの映像を映しながら、屋内でローラースキーを使用して練習できる措置を開発した。

前回のバンクーバー大会では、本大会前にも競技コースを使って練習できたが、ソチ大会では、海外選手が競技会場を使った練習はできないという。

同装置は、足元のコンベヤーの傾斜や回転数を変化させ、実際のコースを滑走している状態を再現できるもの。同部は昨年6月以降、数回にわたって同装置を利用しており、太田選手は「実際のコース映像を見ながら走り、どこに坂があるかを覚え、いつスパートをかけるかなどをイメージした」と振り返った¹⁹¹⁾。

(3) 選手団のスタッフ、選手団内のコミュニケーション

選手あるいは選手団にとっての教訓と、日本社会全体にとって考慮すべきポイントとして、あらためてソチ大会を契機に浮上した教訓——この双方のいわば中間地点に存在する事柄としては、選手団の組織、内部運営の問題がある。

この点については、外部からは分かりにくい問題だけに、選手団報告書に散見されるものに限って見てみると、今後の課題として提起されているものの1つに、サポートスタッフの人数の問題がある。とりわけ、医師が1名のみであったことについて、今回はそれでしのげたものの、今後、入院者が出るような場合を想定すると、複数必要であるとの意見が数人から出されている¹⁹²⁾。また、トレーナー、コーチについても増員の必要を主張する意見が複数見られた¹⁹³⁾。加えて、法務の専門家や、ワックスマン、マッサージ要員などの充実を求める声もあった¹⁹⁴⁾。

次に、大きな課題として提起されているものに、選手団内部のコミュニケーションの問題がある。これには、選手とスタッフとの間のもの¹⁹⁵⁾、スタッフ相互間のもの¹⁹⁶⁾もあるが、とりわけ重要な問題として提起されているのは、コーチと選手との間のコミュニケーションである。これは、基本的には、多くの場合「日本チームは、即席のため、選手とのコミュニケーションが（現地で）ゼロからのスタートになる¹⁹⁷⁾」ことが大きく影響していると考えられる。言い換えれば、多くの試合に常に同行するコーチやトレーナーが存在しないことに問題の根がある。そこから、「専門スタッフによるチーム

体制の構築¹⁹⁸⁾」や「フルタイムで指導できる専属コーチ陣の確立¹⁹⁹⁾」を求める声が聞こえるのである。他方、次善の策として、大会前の合同合宿や世界選手権へのコーチやトレーナーの帯同といった方策により、選手との関係をかなり構築できたとの評価もある。たとえば、クロスカントリースキートのトレーナーの1人は、次のように述懐している。

パラリンピック本番に向けて今シーズンは、10月からの合宿及びワールドカップを、JPC（注：日本パラリンピック委員会）のメディカルサポートの支援を頂いて、断続的ではあるが、パラリンピックまで帯同することが出来ました。これにより以前からの悩みの1つであった（本番直前で初めて触る身体）（選手個々の特性の把握～身体的・性格的）（調整段階に至るまでの問題点の改善～身体的故障の予防や改善・アスレチックリハビリテーション的強化・メンタル的サポート）という問題が随分改善され、パラリンピック本番での競技力向上に繋がりました²⁰⁰⁾。

なお、スタッフ間の連絡の問題の一環として、広報部門と対外折衝部門とのコミュニケーションの問題を指摘する声があったこと²⁰¹⁾に留意する必要がある。

(4) 社会的課題

① 練習環境

社会一般と選手の接点に位置する問題の1つは、練習環境の問題である。これについては、ソチ大会の開会直前に一般国民の中から、パラリンピック選手の普段からの練習環境の整備を訴える声が上がったことが注目される²⁰²⁾。また、具体的事例として、健常者と同じ環境で練習できたことが成果につながったとする例が挙げられる²⁰³⁾。

② 企業の支援

企業による選手支援については、ソチ大会では、社員の4割にあたる4,200名が毎月400円ずつ積み立ててジャパンパラ競技大会などの応援費用にあてている企業で、ソチ大会出場日本選手のうち4名の所属先でもある日立ソリューションズの事例²⁰⁴⁾や、契約社員として入社したパラリンピック出場スキー選手に「手厚い支援」を与えているセントラルスポーツの事例²⁰⁵⁾などが報道されたことに象徴されるごとく、企業の支援への社会的関心が高まりつつある兆候が感じ取れる。

その一方、関係者の中には、ロンドン大会の例を挙げて、「日本代表選手のうち、企業とスポンサー契約を結んでいたのは2～3割（の選手）にすぎない。仕事と競技の掛け持ちで、休暇をとって遠征に出る選手も多い」との報道もあり²⁰⁶⁾、そうしたことを

背景に、「熱心な企業や支援者の善意に頼る日本のスタイルは、転換をせまられている」という論説²⁰⁷⁾にもつながった。

③ メディア

メディア関連の問題については、報道陣の数が、バンクーバー大会に比べて約1.5倍に増えたこと²⁰⁸⁾、NHKが初めてパラリンピックの開会式を地上波で生放送したことが注目された。また、スカパーJSATが、日本で初めて「24時間パラリンピック専門チャンネル」を開設し、生中継を含めて200時間以上もパラリンピックを放映したことも、ソチ大会の「遺産」の1つと言えよう。さらに、スカパーの協力もあって、北海道網走市をはじめ選手の出生地など全国6カ所に、生中継を見ることのできるパブリックビューイングの場が設置されたことも²⁰⁹⁾、冬季パラリンピックの歴史上で特筆すべき事柄であろう。

他方、大会期間中、選手が試合に集中できるよう、選手への個別取材は一切認められなかったが²¹⁰⁾、こうした対応の是非については今後検討課題となると思われる。

なお、今回の大会の報道ぶりについては、人間ドラマ的あるいは新聞社の社会部的発想に基づく報道ぶりよりも、スポーツに焦点を当てた、いわば運動部的視覚からの報道が多かったと評価する声もあるが²¹¹⁾、この点はさらに客観的分析が必要であろう。

また、スポンサー獲得努力の問題と関連しては、パラリンピック関連団体のホームページの充実を課題として挙げる関係者がいたことにも留意する必要がある²¹²⁾。

④ その他

現場の関係者の観点からは、現地を訪れる政府関係者、国会議員などへの対応にスタッフが苦慮したとの声もあったことや²¹³⁾、開会式への選手の出席について、国によってはこれを控えたところもあり、今後の検討課題であるとの意見²¹⁴⁾に注意を要しよう。

B. 大会運営上の問題点と今後の課題

(1) 競技運営上の問題

日本にとって大会運営面で最も問題となったことは、コース誘導の間違いであった。バイアスロン女子12.5キロ（立位）で、コース誘導に間違いがあり（間違った場所にガイド用コーンが設置されていたため出場選手のほとんどが1周目だけ、2.5キロより長いコースを走ることになったが、正規のコースを走った日本の出来島桃子は、最後の周になって、他の選手とのバランスという理由で、2.5キロ長いコースを走らされ、順位を一気に落としたという経緯があり²¹⁵⁾、日本選手団は公式に抗議し、審判団に抗議が

認められないとなった後、IPCにも抗議したが、結局日本の主張（事前にコース図が配られ、試走もしていたはずで、正しいコースを走った者が間違ったコースを走った選手に合わせるのは合理的ではないとの主張²¹⁶⁾は認められなかった。これに対して、記者会見の席上、IPC会長は、「パラリンピックは、既存の国際競技連盟が運営する競技とIPCが管轄する競技など仕組みが複雑だ」と暗に競技運営について基本的な構造上の問題があることを示唆した²¹⁷⁾。

この他にも、運営面の問題として次のような指摘もあった。

バス路線では、五輪開催時からの変更点がいくつもあったが、標識や案内図が更新されず、混乱の原因に。五輪からのスムーズな切り替えは、2020年東京大会でも重要な問題になる。バリアフリー面では各会場で、未舗装の場所や段差が目立った²¹⁸⁾。

(2) 選手村

選手の生活環境に関連するものとしては、移動の不便の問題があった。アルペン競技の選手村は、山の斜面にあるため（エレベーターはあるものの）移動に不便があった²¹⁹⁾。また選手村におけるシャトルバスの数が少なく、この点でも輸送に問題があった²²⁰⁾。

加えて、アルペン競技者用の施設とノルディック競技者用のものとは、部屋の大きさや食事の質などが異なっていたと言われ²²¹⁾、こうした相違が選手に不必要な精神的負担をかけたのではないかという疑念も残る。

さらに、トレーナーが、選手に対して肉体的、精神的なケアを行う部屋が（トレーナー自身の部屋とは別に）確保できなかったことからくる不便があったとの指摘もあった²²²⁾。

(3) その他

なお、日本国内で政治外交的に対応が問題とされたことの1つに、ウクライナ情勢に関連して、欧米諸国の多くがロシアへの抗議の意味も兼ねてパラリンピックの開会式への政府高官の派遣をとりやめたのに対して、日本は桜田義孝文部科学副大臣を派遣したことが挙げられよう。特に、その説明として、「パラリンピックに政治の様々な状況を持ち込むことについては慎重であるべきだ²²³⁾」という点と並んで、「東京でオリンピック、パラリンピック（の開催が2020年に）が決定している²²⁴⁾」ことが挙げられたことが注目される。

注

- 1) 2008北京パラリンピック競技大会日本選手団報告書（以下、「北京大会報告書」）p.64 陸上については、この他にたとえば、車椅子800メートルに出場した廣道純の意見として、「中国など

海外勢のレベルが予想以上に上がっていた。(中略) 海外の有力コーチを招いて技術を学ばないと、世界との差は開く一方だ」(読売新聞, 2008年9月17日)などが報じられている。

- 2) 北京大会報告書, p.107。
- 3) 同上, p.115。
- 4) 同上, p.198。水泳については、北京大会報告書以外にも選手や関係者の感想として次のように報じられている。
(世界との格差は) 前回メダル23個を獲得しながら、今回は5個にとどまった競泳勢が印象的だった。男子50メートルバタフライ(運動機能障害)で銀メダルを獲得した小山恭輔の場合、決勝レースで従来の世界記録より速いタイムで泳いだものの、優勝した中国選手が予選、決勝と立て続けに世界記録を更新した。中国などの今大会に向けた選手強化状況に、日本のそれが追いつけなかった形だ。(中略) 男子の第一人者河合純一は「18人の日本選手のほとんどが自己ベストをマークしていた。だが種目が減り、各国選手が取り組み種目を絞って練習してきた。それも記録を押し上げた」と分析する。(毎日新聞大阪, 2008年9月18日)
河合はまた、「今回の結果で、世界の中で日本が取り残されていることがはっきりした(読売新聞大阪夕刊, 2008年9月12日。)」とも述べている。
- 5) 同上, p.174。
- 6) 同上, p.123。
- 7) 同上, p.122, p.189。
- 8) 同上アーチェリーp.58, ゴールボール p.112, 柔道 p.123, 射撃 p.143, 水泳 p.156, シットイングバレーp.183, 車椅子バスケットボール p.191, ウィルチェアラグビーp.215。
新聞報道に現れたものとしては、たとえば、射撃に出場した又吉清人の発言「重圧がこれほどと知っていれば出なかった」(読売新聞夕刊, 2008年9月11日)や、女子車椅子バスケットボールの菅原奈緒子についての報道「『心が弱い』と認める。技術は申し分ないが、頭が真っ白になることも」(読売新聞, 2008年9月14日)といった例が見られる。
- 9) 北京大会報告書, p.158。
- 10) 同上, p.77。
- 11) 毎日新聞夕刊, 2008年9月16日。
- 12) 北京大会報告書, p.179。
- 13) 同上, p.217。
- 14) 同上, p.74。
- 15) 河合純一の言, 読売新聞, 2008年9月15日。
- 16) 朝日新聞, 2008年3月18日。
- 17) 女子自由形に出場した奈良恵里加の言, 毎日新聞地方版群馬, 2008年9月17日。
- 18) 毎日新聞夕刊, 2008年9月6日。
- 19) 朝日新聞, 2008年9月18日。
- 20) 読売新聞, 2008年9月8日。
- 21) たとえば, 北京大会報告書, p.77。
- 22) 同上, p.70。
- 23) 同上, p.91。
- 24) 同上, p.144。
- 25) 同上, p.74。
- 26) 同上, p.74。
- 27) 同上, p.154。
- 28) 同上, p.67。
- 29) 同上, p.76。

- 30) たとえば水泳, 同上, p.151。
- 31) たとえば柔道, 同上, p.127。
- 32) 毎日新聞大阪, 2008年9月17日。
- 33) 北京大会報告書, p.102。
- 34) 同上, p.151。
- 35) 読売新聞, 2008年9月17日。
- 36) 毎日新聞夕刊, 2008年9月16日。
- 37) 朝日新聞, 2008年9月6日。
- 38) 毎日新聞大阪夕刊, 2008年9月5日。
- 39) 北京大会報告書, p.97。
- 40) たとえば, アーチェリーでのすり鉢状の特設スタンド(同上, p.57), ボッチャの会場の中央部の大型スクリーン設置など(同上, p.95)。
- 41) 同上, p.70, p.78。
- 42) 同上, p.79。
- 43) 同上, p.67, p.85など。
- 44) 同上, p.70。
- 45) 同上, p.149。
- 46) 同上, p.35。
- 47) 読売新聞, 2008年9月7日。
- 48) 毎日新聞, 2008年9月18日。
- 49) 読売新聞, 2008年9月14日。
- 50) 読売新聞, 2008年9月18日の成田真由美についての記事には, そうしたニュアンスが含まれている。
- 51) 朝日新聞, 2008年9月18日。
- 52) 北京大会報告書, p.79-80。
- 53) 同上, p.168。
- 54) 同上, p.52, p.101。
- 55) 同上, p.129。
- 56) 朝日新聞, 2008年9月19日「視覚障害者の柔道では, 畳の場外がわからなかったり, 相手の居所がつかめなかったりすると, 笑い声が上がった。ボールの音を頼りにしてゴールを狙う視覚障害者の5人制サッカーでは, 大声で応援してたしなめられる人もいた」。
- 57) 朝日新聞, 2008年9月6日。
- 58) 朝日新聞, 2008年9月8日。
- 59) 朝日新聞, 2008年9月7日。
また, 読売新聞, 2008年9月11日はこのダンス公演について, 日本人振付師の感想を中心に次のように報じている。「この演出は日本人振付師の高頂(たかね)さん(33)が手掛けた。開会式の監督を務めた張継鋼さんから振付を依頼されたのは1年前。中国共産党が少女を国威発揚の道具に利用しているという批判もあり, 高頂さんはどうすべきか悩んだようだ。しかし数か月間, 練習をともにして, 障害者との心の壁は消えていった。そでに引き揚げてきたダンサーから胸上げされたとき, 高頂さんは得たものの多さをかみしめたという。」
- 60) 北京大会報告書, p.42。
- 61) バンクーバー2010パラリンピック競技大会日本選手団報告書(以下, 「バンクーバー大会報告書」), p.58。
- 62) 毎日新聞夕刊, 2010年3月18日。
- 63) バンクーバー大会報告書, p.76。

- 64) 同上, p.34。
- 65) 同上, p.44。
- 66) 朝日新聞, 2010年3月15日。
- 67) 毎日新聞大阪夕刊, 2010年3月17日。
- 68) 読売新聞, 2010年3月12日。
- 69) バンクーバー大会報告書, p.26。
- 70) 同上, p.40。
- 71) 毎日新聞大阪, 2010年3月14日。
- 72) 毎日新聞夕刊, 2010年3月15日。
- 73) アルペンスキーの例 (読売新聞, 2010年3月14日)。
- 74) 朝日新聞, 2010年3月23日, 読売新聞夕刊, 2010年3月15日。
- 75) 毎日新聞大阪夕刊, 2010年3月19日。
- 76) バンクーバー大会報告書, p.8。
- 77) 同上, p.34。
- 78) 朝日新聞夕刊, 2010年3月20日。
- 79) 同上。
- 80) 毎日新聞, 2010年3月19日。
- 81) 毎日新聞夕刊, 2010年3月19日。
- 82) バンクーバー大会報告書, p.46, p.49。
- 83) 同上, p.66。
- 84) 朝日新聞, 2010年3月18日。
- 85) 朝日新聞, 2010年3月20日。
- 86) バンクーバー大会報告書, p.29。
- 87) 同上, p.63, p.69。選手層の薄さは、車椅子カーリングにおいても指摘されている (同上, p.77)。
- 88) 読売新聞, 2010年3月18日。
- 89) 朝日新聞, 2010年3月21日。
- 90) 毎日新聞夕刊, 2010年3月12日。
- 91) 朝日新聞, 2010年3月22日。
- 92) バンクーバー大会報告書, p.25。
- 93) 同上, p.47。
- 94) 同上。
- 95) 同上。
- 96) バンクーバー大会組織委員会ガイド競技副部長の言 (読売新聞, 2010年3月16日)。
- 97) 毎日新聞, 2010年3月16日。
- 98) 同上。
- 99) アルペンスキー (座位) の日本代表に選ばれていた東海将彦の例 (毎日新聞夕刊, 2010年3月18日)。
- 100) バンクーバー大会報告書, p.48。
- 101) 同上。
- 102) ロンドン2012パラリンピック競技大会日本選手団報告書 (以下, 「ロンドン大会報告書」), p.63。
- 103) 同上, p.116。
- 104) 毎日新聞大阪, 2012年9月2日。
- 105) 毎日新聞夕刊, 2012年9月3日。同じように知的障害男子1500メートルに出場し, 9位だった木村雄哉は「世界のレベルは高かった」と言っている (毎日新聞夕刊, 2012年9月5日)。
- 106) ロンドン大会報告書, p.136。

- 107) この発言（読売新聞，2012年8月28日）はロンドン大会の直前になされたものであるが，大会への出場権を獲得する過程からすでに多くの選手が感じていたことを代弁したものと解せよう。
- 108) ロンドン大会報告書，p.97。
- 109) 読売新聞，2012年9月7日。
- 110) ロンドン大会報告書，p.96。
- 111) 田中の慕っていた山本靖子コーチの死亡もあって消沈していた田中に対して，母親が「山本コーチは空の上にいるよ」と励まして，元気を回復したというエピソード（読売新聞，2012年9月7日）。
- 112) 読売新聞，2012年8月29日。
- 113) 読売新聞，2012年9月3日。
- 114) 同上。
- 115) 読売新聞，2012年8月31日。
- 116) 毎日新聞夕刊，2012年9月8日。
- 117) 読売新聞夕刊，2012年9月8日。
- 118) マラソン（視覚障害）で4位に入った岡村正広の言（読売新聞夕刊，2012年9月10日）。
- 119) 読売新聞大阪，2012年8月28日。
- 120) 朝日新聞夕刊，2012年9月8日。
- 121) この経緯については，毎日新聞地方版群馬，2012年8月28日。
- 122) 毎日新聞大阪，2012年9月6日。
- 123) 読売新聞，2012年9月11日
- 124) 毎日新聞地方版大分，2012年8月30日。
- 125) ロンドン大会報告書，p.56。
- 126) 同上，p.89，p.144。
- 127) 同上，p.62。
- 128) 同上，p.32。
- 129) 同上，p.63。
- 130) 同上，p.55。なおこの点については，北京大会報告書，p.32においてもほぼ同じ文言で改善の必要性が述べられており，北京大会とロンドン大会の間で目立った改善がなされなかったことを裏書きしている。
- 131) 同上，p.89。
- 132) 同上，p.32。
- 133) 同上，p.88。
- 134) 同上，p.82。健常者との合同練習は障害者に自信をつけさせる要因ともなることについて，柔道60キロ級に初めて出場した平井孝明は「近くの高校へ出稽古に行き，晴眼者の胸を借りることがあった。時には負かして自信をつけた」（毎日新聞夕刊，2012年8月31日）と述べている。
- 135) 読売新聞東京茨城東，2012年9月7日。
- 136) 朝日新聞，2012年9月11日。
- 137) 車椅子テニスの川野将太のケース（毎日新聞福岡地方版，2012年9月7日）。
- 138) 毎日新聞西部夕刊，2012年9月8日。
- 139) 毎日新聞地方（淡路）版，2012年9月4日。
- 140) 読売新聞，2012年9月7日。
- 141) 毎日新聞神戸版，2012年9月2日。
- 142) 朝日新聞夕刊，2012年9月5日。

- 143) 同上。
- 144) 朝日新聞, 2012年9月7日。
- 145) 朝日新聞, 2012年9月8日。
- 146) 朝日新聞福岡, 2012年8月31日。
- 147) 毎日新聞夕刊, 2012年8月30日。
- 148) 毎日新聞, 2012年9月4日。
- 149) ロンドン大会報告書, p.32。
- 150) 同上, p.109。
- 151) 同上, p.129。
- 152) 同上, p.51, p.56。
- 153) 同上, p.67, p.144。
- 154) 同上, p.64。
- 155) 同上, p.86。
- 156) 同上, p.111。
- 157) 朝日新聞, 2012年9月4日。
- 158) 朝日新聞, 2012年9月3日。
- 159) ロンドン大会報告書, p.86。
- 160) 読売新聞, 2012年9月8日。
- 161) ロンドン大会では一部のボランティアは, 選手団の幹部に随行する形で観戦したと言われる (ロンドン大会報告書, p.33)。
- 162) ロンドン大会報告書, p.40
- 163) たとえば, 朝日新聞, 2012年9月11日。
- 164) 読売新聞夕刊, 2012年9月1日。
- 165) 読売新聞夕刊, 2012年8月28日。
- 166) ロンドン大会報告書, p.113。
- 167) 毎日新聞大阪, 2012年9月3日。
- 168) 毎日新聞夕刊, 2012年8月30日。
- 169) ソチ2014パラリンピック競技大会日本選手団報告書 (以下, 「ソチ大会報告書」), p.25。
- 170) 同上, p.40。
- 171) 同上, p.38。
- 172) 同上, p.43において, クロスカントリーの関係者は必ずしも明示的ではないが, この点に言及している。
- 173) 同上, p.49。
- 174) 読売新聞, 2014年3月12日。
- 175) 読売新聞, 2014年3月14日。
- 176) 毎日新聞地方版 (岡山), 2014年3月13日。
- 177) 毎日新聞大阪, 2014年3月10日。
- 178) 毎日新聞大阪, 2014年3月14日。
- 179) 読売新聞, 2014年3月13日。新田佳浩以外の出場選手も同様のコメントをしている (朝日新聞, 2014年3月16日)。
- 180) 朝日新聞夕刊, 2014年3月17日。
- 181) 朝日新聞, 2014年3月14日。
- 182) 朝日新聞, 2014年3月10日, 読売新聞, 2014年3月9日。
- 183) 毎日新聞大阪, 2014年3月9日。
- 184) 毎日新聞大阪夕刊, 2014年3月10日。

- 185) 朝日新聞, 2014年3月8日。
- 186) 朝日新聞大阪夕刊, 2014年3月13日。
- 187) 読売新聞夕刊, 2014年3月13日。
- 188) 大日向邦子の言 (朝日新聞, 2014年3月18日)。
- 189) トヨタがFINをサスペンション用などのために開発した技術が, ドイツの選手のシットスキーに活用された例 (毎日新聞夕刊, 2014年3月6日)。
- 190) 朝日新聞夕刊, 2014年3月10日。
- 191) 読売新聞, 2014年3月9日。なお, この記事で太田選手と言われているのはバイアスロンに出場した太田渉子のこと。
- 192) ソチ大会報告書, p.22, p.23, p.25。
- 193) 同上, p.22, p.33, p.36。
- 194) 同上, p.23, p.35。
- 195) 同上, p.34。
- 196) 同上, p.35。
- 197) 同上, p.49。
- 198) 同上, p.44。
- 199) 同上, p.42。
- 200) 同上, p.46。
- 201) 同上, p.26。
- 202) 読売新聞投書欄, 2014年3月6日。
- 203) クロスカントリースキーの阿部友里香の場合 (毎日新聞, 2014年3月11日)。
- 204) 読売新聞夕刊, 2014年3月7日。
- 205) 朝日新聞長野版, 2014年3月14日。
- 206) 日本障がい者スポーツ協会井田朋宏企画・情報部長の言 (朝日新聞夕刊, 2014年3月7日)。
- 207) 読売新聞, 2014年3月18日。
- 208) 朝日新聞夕刊, 2014年3月8日。
- 209) 読売新聞大阪, 2014年3月10日。
- 210) ソチ大会報告書, p.43。
- 211) 同上, p.33。
- 212) 同上, p.35。
- 213) 同上, p.25。
- 214) 同上, p.47。
- 215) 朝日新聞, 2014年3月15日。
- 216) 同上。
- 217) 読売新聞, 2014年3月17日。
- 218) 毎日新聞, 2014年3月18日。
- 219) ソチ大会報告書, p.22。
- 220) 同上, p.26。
- 221) 同上, p.22。
- 222) 同上, p.36。
- 223) 朝日新聞夕刊, 2014年3月6日。
- 224) 読売新聞, 2014年3月7日。

The 'lessons' the last four Paralympic Games have left for Japan

Kazuo OGOURA

(The Nippon Foundation Paralympic Research Group)

Introduction

This paper examines reports submitted by the Japanese team from four recent Paralympic Games (Beijing, Vancouver, London and Sochi) and newspaper reports in Japan to study (A) what lessons Japanese athletes, their coaches and accompanying staff learned about the way they prepared for competition in each sport, and about their participation in the Games; (B) what the Japanese team identified in terms of problems in the administration of the Games and tasks for future Paralympics. (Details of items listed in A, and footnotes and quotes of comments from third-parties in B are only available in the Japanese version of this paper.)

A. Lessons for the Japanese team and tasks for Japanese society

(1) Athletes' competitive level and performance

For all four Paralympic Games, many athletes and coaches point out that Japanese athletes have not reached the international standard in their level of performance, leading to poor results in many sports and few medals. On the individual and micro level, this is attributed to (a) weakness in psychological training and strength (across all four Games), (b) low level of basic fitness (Vancouver, London), (c) problems in maintaining and managing athletes' physical condition (Beijing, Vancouver), (d) insufficient information on rival athletes and national teams (Beijing, London) and (e) not enough awareness of and ability to respond to changes in competition rules (Beijing).

(2) On-site support for athletes

Insufficient on-site support for athletes is also clearly mentioned. Specific examples

include (a) insufficient staff, especially staff for managing sports equipment (Vancouver), coaches (Sochi) and medical staff (Sochi), (b) absence of information sharing within the national team (London, Sochi), (c) problems in the dynamics between athletes and staff, including their effect on the athletes' morale, and (d) actual or potential loss of Japan's competitive advantages in equipment development (Sochi).

(3) Issues in the disability sports environment in Japan

From a broad perspective, the Paralympic Games have highlighted the following issues in the environment surrounding disability sports in Japan: (a) lack of practice venues (Vancouver), (b) difficulty in securing practice time (Beijing), (c) need to increase joint practice opportunities with able-bodied athletes (London, Sochi), (d) need to 'professionalize' athletes (London), (e) communication issues between sports organizations (London) and (f) problems in the governance of sports organizations (London).

(4) Other

More general issues in Japanese society that have been pointed out include (a) the need for more corporate support (Beijing, Sochi) and (b) desirability for more expanded TV coverage and media enthusiasm (Beijing, Sochi).

B. Administrative issues and overall tasks for the future

(1) Participation: the rising standard of competition and the simplification of classification rules are making it increasingly difficult for those with severe disabilities to participate, an issue that remains to be tackled in the future.

(2) Scheduling of events: questions have been raised about holding events late at night. Effort must also be made to reduce the burden of schedule changes on athletes (mainly for winter Games).

(3) Sporting venues: there are requests for more consideration when choosing the location of seating for athletes when they participate as spectators.

(4) Athletes' Village: questions have been raised on non-unified accommodation arrangements for some sports, and the handling of caregivers' access to the Village.

(5) Classification: questions have been raised about the authenticity of some classifications. The timing of making changes to classifications was also an issue.

(6) Spectators' manners: Due to the unfamiliarity of some Paralympic sports among spectators, some point to the need to educate people on appropriate manners at the

Games.

The following are detailed observations about each of the Paralympic Games.

1. Beijing Paralympic Games

(1) Participants

There is great significance in ensuring that people with severe disabilities can participate in the Paralympics not only from the point of view of people with disabilities but also from the perspective of raising social awareness. In Japan, the awareness that a stronger structure of support for disability sports is needed for those with severe disabilities to participate, has become reinforced through the Beijing Games. It has also become clear that this is an important issue that relates to numerous aspects of disabled sports, such as defining characteristics of the Paralympics (for example, their commercial aspect and media-oriented tendency), approach to classification and the choice of competition events.

(2) Games venues

Spectators generally praised many Paralympic venues for their ease of event viewing. However (since athletes cannot access general spectator seating), some pointed to poor positioning of athletes' viewing sections, which made it difficult to see the progression of individual matches (boccia). There were also cases where there were not enough monitors in athletes' waiting rooms (judo).

(3) Athletes' Village

There were some issues regarding access to the Athletes' Village by staff caring for athletes requiring transfer assistance and other care, and the number of caregivers allowed. Some raised questions about having athletes with visual impairments share a room.

(4) Division classification

Several points were raised about division classification, highlighting issues that need to be addressed in the future. One is the timing of classifications. Many ques-

tioned the practice of re-classifying divisions after athletes arrived at the Games. However, this is a complex issue, and others point out that conditions change with some disabilities, making it necessary for those athletes to be classified for each competition into the division that reflects their condition at the time. The Japanese swimmer Mayumi Narita was re-classified three times within a period of three years from 2005. The Japanese team objected, but the objection was not accepted.

There were cases that raised questions about whether division classification is actually an effective system. An example is the classification adopted in the Paralympic marathon. The Beijing Games combined the T11 classification for athletes with the most severe degree of visual impairment with the T12 classification for athletes with a lesser degree of visual impairment. T12 athletes can practice alone without a guide runner, while T11 athletes cannot practice unless a guide runner is available. Some pointed out that it was unfair that such a difference in the practice environment was not taken into consideration.

The psychological impact of classification on athletes has an effect reaching beyond their participation and performance in the Paralympics. Modification of a classification entails that world records set in that classification cease to be Paralympic world records, and it has been pointed out that this can have psychological effects that should not be ignored.

The classification system that is currently being used is based on an approach that emphasizes competitiveness and simplification. As a result, there are issues for ensuring fairness based on the degree of disability. The examples below concerning Japanese athletes address this problem, and show that it is a major challenge which has direct implications for what the Paralympics represent. The emphasis on competitiveness and the exclusion of athletes with severe disabilities represents a focus on performance records, and some may say that such an approach could reinforce the idea that able-bodied athletes are preferable in sports.

(5) Competition rules and judging

Regarding competition rules, the report on the Beijing Games from the Japanese national team refers to questions raised by the Japanese team concerning the relay running and table tennis. The use of the baton in the relay running was eliminated based on the argument that it would be unfair for athletes without hands. However,

the decision is questionable as this has done away with the baton-handover technique, a highlight of the relay running.

In table tennis, questions were raised on the way rules for the height of wheelchair cushions and the contact requirement for the thigh were judged.

There were also questions regarding the competence of umpires in cycling, and a call to clarify the judging criteria for powerlifting.

(6) Spectators and volunteers

Problematic attitudes of spectators were pointed out in some events, including judo and football 5-a-side, shedding light on the fact that spectator education and increasing social awareness on Paralympic sports are key tasks for the future.

A volunteer training publication, compiled by the Beijing Olympics / Paralympics Organizing Committee, had to be recalled from bookstores after it was revealed that it contained discriminatory remarks such as “people with visual impairments do not show their emotions” and “people with physical disability are obstinate”. This showed the discriminatory mentality that persists in Chinese society, but at the same time suggested that the Paralympics could be used as a medium for eliminating discriminatory mentality.

The Beijing Games included the participation in swimming of a U. S. (female) soldier wounded in the Iraq war and a dance performance in a wheelchair by a girl who lost her left leg in the Sichuan earthquake, showing first hand that the Paralympics can be a catalyst for social participation by those who have become disabled through war or natural disasters.

In the Beijing Games, the involvement of volunteers has attracted praise from numerous athletes and staff. At the same time, a language barrier caused difficulty to many athletes. The fact that many drivers only spoke Chinese was identified as one of the issues.

2. Vancouver Paralympic Games

(1) Athletes' Village

Some participants felt inconvenienced by the fact that athletes' accommodation was not centralized in one site, but dispersed. The issue of accommodation dispersion coupled with the change in the competition schedule was cited as a serious burden on

athletes.

Regarding accommodation rooms, some athletes were given rooms without furniture or amenities.

(2) Competition rules

The handling, especially the timing, of revisions to competition rules posed some problems from the Japanese perspective. In some sports, athletes in the Japanese team had trouble adapting to a sudden revision of rules, sometimes immediately before the Games were due to begin. Some may say that Japan's failure to gather information on international plans for revising rules was caused by Japan's lack of efficiency in gathering relevant information and problems with the amount of Japan's involvement in international activities. In any event, ensuring fairness and transparency in revising competition rules is a task for the Paralympics as a whole.

(3) Media relations

For reasons of television coverage, areas accessible only by athletes and not their coaches were expanded in events such as the biathlon. This prevented coaches from approaching the track to issue instructions to athletes based on time checks or to prepare equipment such as spare balls. This is an issue of balancing between competition environment improvement and media relations, and can be described as a task for how the Paralympics should be run.

(4) Schedule changes

The Games ran out of spare days due to weather-related postponement of downhill events. In order to complete all the events during the Paralympics period, slalom events, which can be carried out in poor weather, were moved up, while downhill and other speed events were rescheduled for days when good weather was forecast. While the rescheduling was due to the weather and beyond the control of Games management, it was an unnecessary burden and difficulty for athletes. Some athletes had to give up competing in their events because of the rescheduling.

(5) Other

Some pointed out that it was necessary to spread and strengthen Paralympic

sports across Asia to boost Japan's performance. The number of disability sports events must be increased in Asia to build results for winning participation rights in the Paralympics. Having rivals in Asia will also help strengthen the Japanese team, and improve Japanese athletes' ability for international communication. This sheds renewed light on the importance of promoting regional organizations and events in the international Paralympics movement.

3. London Paralympic Games

(1) Physical environment and conditions

Regarding competition venues, Athletes' Villages and other facilities for the London Paralympics, the fact that there were three separate Athletes' Villages (one in London city, one in London's suburb and the other in Weymouth (about three hours away from London)) did not cause much inconvenience for the Japanese national team as a whole, but presented problems for the Japanese sailing team accommodated away from London. It was not only a matter of convenience, for example for communicating with staff, but raised the question, to what extent athletes and staff staying a substantial distance away from the main venues should attend events such as the opening ceremony (which could present other problems such as sacrificing training time).

Aside from the location of athletes' accommodation, the location of training grounds for some sports was a problem. For example, the training venue for sitting volleyball was far (with a travel time of up to 2.5 hours in peak traffic hours), which affected the athletes' condition.

Regarding accommodation for athletes, it was felt that information about room facilities such as bed height, toilet type (with or without a back rest), should be circulated in advance, considering the need to facilitate the participation of athletes with severe disabilities.

(2) Schedule and related matters

Some games such as wheelchair rugby and some of the field athletic events were held after 9 p. m., causing difficulties in athletes' schedule management. There is a need to reconsider assigning late hours to sports whose games are not usually held at night.

(3) Classification

The marathon was one of the sports which raised questions on the effectiveness of division classification. Many question the rationale behind having those who cannot run without a guide runner and those with weak vision who can run without a guide runner compete against each other.

With equestrian events, a similar question has been raised about having those with complete paralysis of lower limbs and those who can walk with a walking aid compete in the same division.

There was also the question of whether it was fair to have teams with very different disability levels compete against each other. For example, in sailing, all countries that won a medal had a lower level of disabilities as a whole (13 or 14 points) as opposed to Japan, which had very high disability classification points of 9. It remains to be seen whether the difference in disability levels should be overcome through developing a larger pool of athletes or through incorporating differences in disability levels in match results in some form.

It should be noted that the basic approach to classification also came under criticism. First, there was the matter of timing. Just before the Games began, 40 athletes were told that they had been re-classified. This attracted international attention, in part due to protest from an athlete from the U. S., the world record holder in the women's 100-meter freestyle. Some Japanese team members also questioned the fairness of so-called functional classification. More information should be provided so that athletes themselves can be satisfied with the classification procedures.

(4) Handling of caregivers, guides and volunteers

The main issue with the handling of caregivers was the restriction on their access to the Athletes' Villages. Many pointed out that the same approach as the Olympics could not be adopted for the Paralympics, and there must be further examination of the degree of access restriction.

The London Games became the first to award medals to guides participating in competitions with athletes. However, questions were raised concerning the rule to exclude guides who are one of several guides registered to the same athlete.

Volunteers are not given special opportunities to see games and events. However, in view of the significant role of volunteers in the Paralympics, providing opportuni-

ties should be considered.

(5) Spectators

In the London Games, special viewing tickets were allocated to athletes' friends and families (AF&F tickets). If this system is to be maintained in future Games, there should be clear protocols to be defined, such as the balance of distribution between reserved and on-site tickets, application procedures and the roles of each country's Paralympic Committee.

(6) Anti-doping measures

There were only four anti-doping violations in the London Games. However, there was criticism that the anti-doping system was not updated, without testing during the Games, and testing only 1,250 athletes in Games with a scale of 503 events and 1,522 medals.

(7) Other: Factors which should be taken into account in preparing for the 2020 Tokyo Paralympic Games

Lessons from the London Games that are practical or provide a useful point of reference (and not included in B-3-(1) – (6) above) include the issue of coefficient typing errors. Athletes' final results are determined using a formula, applying a coefficient reflecting the degree of disabilities to actual performance records. For this reason, absolute care must be paid in typing these coefficients into the system. The importance of this task was substantiated in the London Games, where miscalculations caused by incorrect coefficients led to cancellations and changes in awarding medals.

Another issue, not limited to the London Games, was the increasing role of repair and maintenance services, corresponding to the increased participation of athletes from developing countries who do not have top-class equipment or wheelchairs. On-site assistance for athletes from developing countries who find difficulty in arranging sufficient equipment, is one of the tasks that should be examined for the 2020 Tokyo Paralympic Games.

One of the notable characteristics of the London Games (for Japanese people) was the entertaining atmosphere at some of the venues. Archery, for example, became

known for a 'festival atmosphere' from the Beijing Games, and incorporating commercials into event announcements. It is necessary to consider what can contribute to the atmosphere at sporting venues.

We also cannot ignore how the London Games were used for politically symbolic gestures. The first-time participation of North Korea in the Paralympics was particularly notable from the Japanese perspective. Attention was drawn in Japan to the woman who walked alongside the sole North Korean athlete (Rim Ju-Song, who competed in the men's 50-meter freestyle in the swimming event) in the opening ceremony. It was Li Pun-Hui, who has a son with cerebral palsy, is the head of North Korea's disability sports association, and was once a member of 'Team Korea', consisting of North and South Korean table tennis players, which won the World Table Tennis Championships held in Japan.

Finally, one of the main 'legacies' of the London Games was the participation of Paralympic athletes alongside Olympic athletes in post-Games parades. Britain showed the rest of the world that the host country should bring Olympic and Paralympic athletes together in opportunities such as the parade.

4. Sochi Paralympic Games

(1) Games administration

For the Japanese team, the biggest problem in the Sochi Games arose in the women's 12.5km biathlon. A mistakenly-placed cone led most of the athletes to run a course longer than the normal 2.5km in the first lap. Japanese athlete Momoko Dekijima, who ran the correct course in the first lap, was guided into the longer course in the final lap to ensure fairness with other competitors, consequently tumbling her leading position. The Japanese team lodged a formal complaint, and when it was rejected, filed an appeal with the IPC. Japan's argument (forcing an athlete who followed the correct course to compensate for others who made a mistake cannot be accepted, considering that everyone had been given a course map in advance and done a practice run) was turned down.

Other administrative issues were highlighted. For example, changes were made to many bus routes for the Olympics, but the failure to update signs and route maps led to passenger confusion. Smooth transition from the Olympics will be one of the key challenges for the 2020 Tokyo Paralympic Games. In terms of making venues 'barrier

free', there were numerous unpaved areas and sites with gaps in floors.

(2) Athletes' Villages

Issues associated with athletes' accommodation arrangements included inconvenient transfer within Athletes' Villages. Athletes competing in Alpine skiing events were housed at a site on a mountain slope, and experienced inconvenience (despite elevators in the accommodation). The low number of shuttle bus services at the Athletes' Villages also compounded the transportation issue.

In addition, there was reportedly a disparity in the size of rooms and quality of meals between facilities for athletes in Alpine events and athletes in Nordic events. Questions remained whether such differences caused unnecessary psychological strain on athletes.

Athletes also voiced the inconvenience of a lack of separate rooms (also separate from the trainers' rooms) where they could receive physical and mental support from their trainers.

(3) Other

The crisis in the Ukraine was one of the factors that drew attention to political and diplomatic attitudes and responses. While many western nations canceled the attendance of senior government officials in the Paralympics opening ceremony, Japan sent Yoshitaka Sakurada, the Senior Vice Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology. The Japanese government's reasons in defending the decision – that caution should be exercised about bringing politics into the Paralympics, and the fact that Tokyo is the host of the 2020 Olympics and Paralympic Games – are of interest.

日本財団パラリンピック研究会紀要 第3号 (別冊)

2015年9月発行

発行者 日本財団パラリンピック研究会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-3-5 赤坂アビタシオンビル4階
電話：03-5545-5991 Fax：03-5545-5992
URL: <http://para.tokyo/>

Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group Vol. 3 (Special Supplement)

Published in September 2015

Publisher Nippon Foundation Paralympic Research Group
1-3-5-4F, Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052 Japan
Tel: +81-(0)3-5545-5991 Fax: +81-(0)3-5545-5992
URL: <http://para.tokyo/english/>

ISSN 2189-1672

The Nippon Foundation Paralympic Research Group

Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group